97-118

宗教と自然美

序

編者、余に求むるに本書の序文を以てせられしも、新に稿を起す遑なかりしまゝ、曾て自然美に關して書きすてたるものどもかき輯めて茲に其責を塞ぐ。

*　*　*　*　*

神其造りたる諸々の物を視たまひけるに甚だ善かりき（創世記、一の三十一）

主や爾の工跡は何ぞ大なるや、皆智慧を以て造れり（聖詠百三の二十四）

神の造り給ふ所は皆其時に適ひて美をなせり（傳道書三の十一）

野の百合花は如何にして生長つかを思へ、…ソロモンの榮華の極みの時だにも其裝ひ此花の一に及ばざりき（馬太六の二十九）

神造る所の物皆美なり。感謝して受くる時は棄つべき物なし（提太前四の四）

自然美と品性

凡そ美は調和の表式なり。精くは複雜の中の統一なり。自然美に於て殊に然りと爲す。既に自然は調和を以て特質とす、這間に悠々自適するもの、誰か其の感化に由りて品性の調和を覺えざらんや。例へば身を自然界に置く時、人は不知〳〵全く我を忘れて自然と共に渾然融化の狀態に至るが如し。斯の如くにして人は其狹隘なる個人的生活の範圍を破却し了して更に擴大せられたる自然界の生活に入り、茲に全く物我の差別を超脫して直ちに宇宙の巨靈と融和体合するに至りて茲に品性の調和は、そが善美なる極致に達す。

二　自然美と主觀

美は多くの場合に於て主觀的也。換言すれば美の對象其物は『我』の描寫に外ならず。人は畢竟自然に於て客觀化したる主觀を讀むなり。故に我等が自然より享受する所の美感は、自然に對する瞬間に於ても尙ほ我が精神狀態の如何に依りて異なり。若夫れ我にして豫め一種の目的あり、利益觀念のあるありて以て自然に對せんか、其時に於て自然美は我が爲に單に利の標的たらんのみ。而も美の假象に在らざるなり。されば自然美に對する者は須らく此世の計算以上齷齪以外別に燃ゆるばかりの美意識と渴仰の念とを要す。

自然美と同情

平明澄徹の水面に非ずんば玲瀧、珠の如き月も形を爲さゞるなり。

同情なき所に事物の眞相は宿らず。蓋觀察は同情を要求するものなればなり。同情なき者は觀るの資格なく、語るの權利なし。同情なくして自然に對するは尙ほ信仰なくして禮拜せんとするが如し。畢竟僞善たるを免かれず。斯くて尙ほ同應同感の心なくして自然に對せんか、自然は彼が爲に寧ろ幕を被らんのみ。故に若し誰か其幕を開かんと欲せば、彼は先づ『純善』の人たるを要す。

自然と觀察

觀察は須く宏濶にして周到なる可し。而も宏濶に過ぎて周到を欠ぎ、周到に過ぎて宏濶を欠くこと無かる可し。慢に高山大江の輪郭に心を奪はれて脚下に笑める野花一輪の美を忘るゝ勿れ。又只管眼前、方一丁の景に憧がれて屬目千里に亘る自然大体の形勢を看過す る勿れ。更に地上現象の變化に見惚れて是が背景を爲す所の天上雲

影の變幻を忘る可からず。見よ、日光と色調の關係とを。茲に天地の連絡あり。茲に時間の繼續あり。茲に巧妙なる意匠の配合あり、若夫れ旅行者にして茲に一度注意するところあらんか、自然は活ける幻影として彼が前に現はれん。

山岳と理想

原頭に立て山を望む。山猶ほ低きを覺ゆ。登りて漸く絶頂と思ふ邊りに達すれば、鼻端新たに高山の起るあり。勇を鼓して更に登攀數時、纔て高峯の盡くる所に達すれば、何ぞ斗らん絶頂と思ひしは未だ山麓にして、目的の山は雲を隔てゝ遙か高空の上に在り、茲に於てか古歌の所謂『心あての雲間は猶もふもとにて思はぬ空にはるゝふじのね』の妙趣を味ひ得べし、理想は低きが如くして高く、近きが如くして遠く、我等が永久の教導者にして常に我等の前を爲す

と雖ども、古來何人も彼女と接吻せしものなく、彼の本體を伺ひし者なし、然れども絶へず理想に離るゝことなく、終りまで彼女に忠實ならん者は幸なる哉。

日本人と自然崇拜

日本人は世界諸民族の中に於て最も重なる自然崇拜の民族なり。中にも山岳崇拜を以て甚だしとなす、國中の山岳は皆是彼等の拜殿たり、祭壇たり、同時に神體たらずんは非らず、試みに盛夏三伏の候、山國に出でゝ古來名たゝる山岳を仰望せよ、さらば峯より峯、谷より谷を罩むる數隊の白蟻を到る所に認めん、其は巡禮者なり、彼等素より妄信の徒たるに相違なし、而も同時に又彼等は上下滔々腐敗せる國民の中に在りて少くとも高潔なる信念を保持する一部の撰民たるに相違なけん、我は寧ろ腐敗せる骸骨的國民を以て飾らるゝ國家の未來に望を置かざるも、彼の一種の理想と希望と渦仰と、崇拜の念に燃ゆる一部巡禮者の今日所謂文明社會に存するを見て、心私かに斯國の爲め、神に感謝の祈禱を禁ずる能はざるものあり。然り縱令此世の智者學者は、胃より腦にかけて腐蝕し盡すとも、日本中央山脈に富士山の聳ゆる限り、太平洋岸に金華山の浮ぶ限り、南方霧島山に煙の絶へざる限り、斯國と斯民は永く亡びざる可し。

自然と神秘

文學美術は其發達の極致に於て神秘の境地に入らずんば止まず。自然美の觀照も亦遂に我等を卒ゐて神秘に至るなり。殊に夜の世界孤島の夕、高嶺夜半の月に於て、自然は神秘の特相を帶び來る、自然を單に一の形式美として觀ば、自然より受くる所甚だ乏しからん例令一莖の草花も猶之を神秘的に觀照せば、茲に創世以來解す可か

らざる神の永能と神性とを讀むを得べし。傲慢なる智識は自然より神秘的分子を取り去らんとすと雖ども、神秘は依然永久に神秘なり世界と人生は既に一種の神秘に非ずや。歴史は曾て人生のアリファオメガを說かず只其過程を語るのみ、科學は決して現はれざる宇宙の極致を現示する權利なし。只其中央を示すのみ、而して歴史の說かざる所、科學の示さゞる所、茲に神秘存す、寧ろ是等は神秘に說かざる可からざるを奈何せんや。

自然と感謝

舊約の詩人は歌ふて曰く『神や爾の工跡は何ぞ大なるや、皆智慧を以て造れり』と。然り讃美と感謝は將に是れ創世以來詩の純なるものに非らずや、一莖の花、尙能く神の光榮を現はし、又能く己が感謝の意を表はす。自然は是れが爲めに美なるものとなり、意味あるものと爲れり。美は畢竟感謝の最高極致にして、寧ろ感謝は美の最高極致と云ふも可ならん。若し夫れ夏日峻坂を攀ぢて峠に達する頃、微風來り、頬を吹く瞬間、清泉湧き、鳥歌ひ、花笑めるを見て誰かは感謝の念に溢れざらんや。實に感謝は精神の最も純美なるときに於て現はるゝ感情の極致にして、是れなくんば人生の意義遂に空し。されば感謝は人生の第一原理にして、曾て萬國史の始めを爲せしものは感謝の聲なりき。而して其終りを爲すものも同じく感謝の聲ならんか。

駿臺　富士見ゆるあたり

昇曙夢生

天よ聞け、地よ耳をかたふけよ
エホヲの語り給ふ言あり、曰く
われ子をやしなひ育てしに、彼
等は我にそむけり、牛はその主
をしり、驢馬はそのあるじの廐
を知る、然どイズライリは識ら
ず、わが民はさとらす。

（以賽亞書第一章二、三節）

例言

本書の原著は露國キエフ神科大學刊行雜誌 BOCKPECHOE ЧТЕНИЯ より拔萃して一卷となせる KHИГA ДЛЯ HAЗИДATEЛЬHAГO ЧИТЕНИЯ（敎訓集）にして、數年前其全部を飜譯して正敎會飜譯局より出版せられたり本書は該譯書中より本題に關係ある部分を拔萃し、更に之が文体を改めたるものなり。

原譯は遺憾ながら難晦の節多くして、趣味津々たる原書の妙味を沒了するの嫌少しとせず。是れ編者が久しく遺憾とせる所、加之今や時代は著しく宗敎に對する渴仰の情念を高め來れり、特に青年間にありて顯著なるを觀る。是に至りて益々此種健全にして趣味深へ崇高にして感興淸らなる思想と信仰とに觸れしむるの要切ならさる

を得ず。　若し茲に原著を再譯して以て此の要求に應するを得ば寔に両全の擧なりと雖も、懶らくは編者が露語の素養未だ此に達せず止を得ず既譯に憑據して筆を執るに至れり。原譯の難晦なるは多くは原著に照索して改めたるものあり。然れども多少亦達意を本意として必ずしも原書の行文に據らざりし節もなきにあらざるなり。唯恐る編者が不文は原著を去る更に甚しからんことを。書中最后の四篇は曾て我が雜誌『使命』に登載せるもの也。

本書に就ては友人昇曙夢君の勞を煩はしたるもの頗る多し、記して以て原意を謝す。

明治三十六年十一月下浣

編者識

宗教と自然美

目次

自然と人生……一
枯木……一〇
我年は蛛網の如し……一四
百合……一九
黒一點の豆大球……三四
諸の天は神の光榮を傳ふ……四六
光あれ……四九
幽微なる元素……五八
蒼海の美……六五

人は何物……六八
髑髏……七五
死の海……八〇
夕暮の歌……八八
星の天……九三
夜半……一〇〇
附錄
高嶺の月……一一五
海と人生……一一七
濁浪……一二〇
颶風……一二九

宗教と自然美

自然と人生

水よ、汝は何處に急ぐなる。絶へず又何處に汝が波をば轉ばすなる。如何なれば地の面を流れ廻るや。そも亦地の腹のうちなる有らゆる臟腑を潜ぐるは何故ぞ。

我等が流れを急ぐは、地の有らゆる不淨を洗はんとてぞ。又有らゆる地を經廻るは、人が遺せし一切の不義を浚ひ集めてそを天の父の公義の眼より逸早くも海の淵に隱さんとてぞ。さはれ我等が凡ての勞は、おん身等の助けなくては甲斐なき

ものなるぞ、そは偽める心より出づる悔改めの涙の一滴は、テーグル及びエフラト河の有らゆる水よりも尚ほ強ければなり。

＊　＊　＊　＊　＊

地よ、汝は如何なれば何時も同じ軌道をのみ辿りて廻轉るや。稀には汝が好奇心もて太陽に近づき、或は遠ざかるも面白ろからずや

好奇とや、そは亦余に何の益かある。余は唯我が造物主の指し給ふ道を走らは運命餘りあるものを。今余には晝夜と四季とあれど、余にして若し我が位置を退かんにはそが循環は再びなかるべきぞ。彗星は然るべくそがひねくれたる途をさまよひつ、時に傲然として太陽に向て進み寄るも宜かべし。彼等も折には暫し中天に尾を引くことあれど、そが外には絶へず寒氣に凍えつ見えずあるなり。

＊　＊　＊　＊　＊

鳥よ、汝は如何なれば斯くも暢氣なる。時きもせず積みもせて唯歌ふばかりならずや。

我等に何の煩ひかある、天の父は我等に代りて蒔き、養ひ給ふなるに、いかで我等は疾く起きつ感謝せてあるべき、おん身らは眠り我等は歌ふ、そは世に在る者は何人も絶間なく造物主を讃美すべきものなれば。

太陽よ、汝は何が爲に日毎出沒するや。いかなれば又斯くも曙と暮とを麗しく飾るなる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

そはおん身らが余に於て生死の樣を學ばん爲とこゝ知り給へ而しておん身らはろを見て、余と同じく墓に入り、時到らば永遠の東に出づるものなるを悟るべきぞ。余が暮を飾るはおん身らがそを見て娛み、又己が入日(死)を恐れざるやう慣らし且平素の善德をもて其暮を飾るやう心懸けしめん爲にぞ。おん身らは太陽の血の雲又は黑き雲の中に隱るゝを此上なく不快に思ふなるらむ。さりながら余に取りては彼の狂へる慾念に蔽はれつゝ終に悔改めもせで死する罪人を見るは更に〳〵辛さぞ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

野の花よ、汝が野原に斯くも澤に咲き出づるは何の心にや。汝等の中、多くはソロモンの榮華の極みも尙ほ及ばざる美をもて麗しく裝ひたるは又何の心にぞ。

我等が斯く裝はれたるは、おん身らをして外面を飾ることをせず、自然を尙ふべきを敎へん爲にぞある。我等が斯くも澤に自然の懷に萠え出づるはおん身等が我等の如く造物主の至仁なる手に頼りつ自然のまゝに生ひ立つ心だにあらば、造物主は御身等を粧ふに吝ならざるを敎へん爲なり。

＊　＊　＊

星よ、汝は何すれぞ斯く親しく夜毎出て〻輝く。又如何なれば斯く愛嬌をもて人々を凝視めるにや。

＊　＊　＊

此は地上の旅行者に向て、天の父の家には邸宅多きことを告げ、又星と星と各々其が榮を異にするは曾て己が天の出たるを忘れざりし地上の勞働者が死者の復活の日に於て受くべき運命を告げん爲にぞ。

＊　＊　＊

火よ、如何なれば汝は觸るゝものを皆焦し且蝕すにや。又何處より點するも凡て天に向ふは何の心にや。

＊　＊　＊

そは地上には人の靈性の焔に當るべき者なきを示し、又人の靈性をして其虚榮と偶像とを破りて憂も悲もなき所に向上せしめんが爲めなり。

＊　＊　＊

磁石よ、汝は南と北に何をか有する、絶へずろが方に向ふは又何の心にや。

＊　＊　＊

是れ造物主の意思に外ならざるなり。余が地上にありて方向を示すが如く、おん身らも亦良心をもて向ふ所を定むべきぞ余が南北を指す力の失せたらんには航海者の危險を釀すが如く、おん身の良心にして若し正邪を判別する力を失ひたらん

には其は誠に一大事なるぞ。

* * * * * * * * *

噴火山よ、汝は如何なれば斯くも猛烈に、恐ろしく、燃ゆるなる又何すれぞ斯く多くの煙と石と灰と焔とを噴きつゝあるにや。

何んとて恐ろしからてえあらるべき、我等は神の怒に代りて燃ゆるなれば……。我等が内には不義者を罰する大審判の火を貯へらる。おん身等は我等が外觀を見て既に驚けど、若し我等が内にあるものを一見したらんには如何、神の威赫し給へる所の火の湖は疑ふべき餘地なきに至らむ。

* * * * * * * * *

野よ、畑よ、何故汝は種子を受けつゝ時としてはそを匿すや。何故に萠え出づるものを濕氣にて呑み、綠の若葉を乾燥にて亡すや。

我等はおん身の心靈に擬しつゝあるなり。生命の種子は幾何おん身らの心に蒔かれて、而も成長して實を結びたるは幾何ぞある。夫れ感謝をもて蒔くものは感謝をもて刈る。おん身らは如何に蒔かんとぞし給ふ。

枯木

去歳の春我が愛てし樹麗はしく裝ひ出て、孤立の我をば朋友の如くに慰めにき。綠濃きその枝は我が書窓に垂れ懸りて、室内に掲けたる神童を抱き給ふ聖母の聖像をは奥床しう蔽ひぬ。宛から亦新洗禮者の白衣の如く艶々しく粉裝ちて、そが中より芳はしき香をば湛へつゝ、見るものをして祈禱の淨念を喚び起さしめては止まず。我は朝な夕なそが下に走りて打眺めつ、我が手と心にて愛撫措かざりけるなり。日の暮れて露樹上に宿れば我はそが凉々しき葉の一片を採りて、思考に熱せる我が額に押當てゝ娯みぬ。

人あり我が樹の前を過りて曰ひけるは、「來ん春には此樹復花咲かざらまし、そは此の春餘りに咲き過ごしたれはなり」と。我は此の

戯言者の言を信するを敢てせざりき、徒に信するを欲せざりしが故なり。しかはあれ我が樹は終に花咲かずなりにき。そは去歳の春餘りに咲き過ごしたるに因ればなり。樹は枯れぬ、そは嚮きに餘りに華奢なる生活を爲したれはなり。是に於て我は樹木に對してナザレンの聖グリゴリイの曰ひける『若し善も善ならずんは善ならず』の一語を思ひ出てざるを得ざりしなり。そも何ものか世に生活するより貴かるべき、而もそを急くものは我が世を經過し能はざるものなり。

園丁は彼の枯木を指して告けて曰ひぬ。「こを伐りてそれに接木するべきにぞ」と。われは之を伐り去るを痛くも惜みにき。我が兒亦涙ながらに忠告すらく『請ふこを其の儘にあらしめ給へ、兒は此の樹と別るゝに堪へ得ざるなり、我等は此の樹の能く花を咲かし、或

は緑なせし時にはろを保存せしにあらすや。父よ、我等は猶も愛て〻捨てざらむ、何時かは全く枯死することあらんも、我等はそを紀念の碑として保存せむ、恐らく亦ろれより新芽萠え出てぬとも計りかたからんものを』と。父は答ふらく『兒よ、おん身の思ふがことくせよかし、神は泉の涯に生長つ林のことく、善德をもて咲く義人にて慰められ給ふなり。さはれ又神は枯木の如く善德に干乾びたる罪人をも憫み給ふにぞ。神の子は零落せざる人を愛て給ふは固より なり、さはれ又零落の人をばいやまし愛て給ふ。主は沈淪の子を恢復せんとて世に降り臨みて曰ひ給はく『眠れる者よ起きよ、死より蘇生るべし』と。

我は尙ほ罪人に至大の同情を湛ふる大說教者聖金口の語りけるを記憶せるなり。『神は實に義人を憐み給ふ、されと罪人に對しては尙ほ多く忍び給ふなり。驚くべき言を聞まほしと思はゝ聞け、神は何處にありても義人に嚴に現れ、罪人には慈悲に現はれ給ふ。しかも罪人を憫むに迅速なり。曾て沈淪せる罪人を起して曰ひ給はく『人もし仆るれは起きかへるにあらすや、もし離るれば歸り來るにあらすや』（イエレミヤの四十八）と。抑も此世に於て敬虔に富みたる人は神にありて義人なり、此世に於て敬虔に貧しき人は神にありて罪人なり。故に神は罪人をは貧者として憫み給ふ。富者に求むるが如く義人に求め貧者に與ふるが如く罪人に憐み給ふ。なへて敬虔てふ富に依りて人に詳細の決算を促し給ふ』と。

我が年は蛛網の如し（詩篇八十九の十）

吾人が年――虚空なる吾人が生活は蛛網と比較し得べけむ。それと此とに如何なる類似のあるべき。

蛛網は蛛てふ動物の織り成せるにて、精緻なる糸に似たるを紡ぎ出すなり。さても吾人が虚空なる生活は何によりて組織せらるゝものにや。吾人が内――心霊に貯蔵せらるゝものをもてせらるゝにあらずや。人は最初に於て己が虚空なる希望と豫想の上に我が世の基礎を建つるものゝ如かるなり。しかして之を己が外に實行しつ、我が造作をもて自己を圍むは、宛から蛛の、己が網をもて圍まれつそが範圍内に生活するか如し。

如何なれば蛛には薄きろの織物を要するにや。蛛は己か生命より

紡きつ織りつ、そが生活を維持す。網を張るは食を得んが爲めなり。そも人の子は何を夢みて齷齪として日も是れ足らざるぞ。人は己が生命を維持する目的を有す。かるが故に自己滿足の慾に飽かんとて噪せり行くなり。斯くて人々自ら以念へらく、人生茲に眞の活路ありと。されと虚空なる俗事に噪る人の子の如何に欺かれつゝあるよ蛛は己が所有を消費せんも、必要を超えては敢てせぬなり。されど虚空の人は外物に養はるゝより寧ろ多く己がものを消費す。此の世より受くるよりは寧ろ多く世に與へつ、つねに饑に惱む。蛛は己が網もて蟲を捕ふもそれに咬まるゝことあらじ。されど人の子は外面の幸福を捕へんとて網して而も自ら網せらる。『惡人は己が手の業にて傷つけ、自ら設くる所の謀にて陷る』（詩篇九の十七、二十三）

蛛の織物は之を作るに多くの勞働を要するに拘らず、そが資料は

いとも纖弱にして、一小微力も猶ほ此の空中の建築を破り去るを得べし。吾人々類が諸凡の虚空の事業も、吾人が因りて以て自愛の食に供する勞作も亦皆斯くの如くあらざるなき乎。最も麗はしく堅牢此上なく造られし物も微かなる案外の事より壞倒する例少しとせず火花の微けき一つにすら吾人が有らゆる財産は烏有に歸せらるゝあり。僅に風の一嘘は吾人が一生の健康をも奪去る。微かなる動搖すら以て吾人が生命をは失はしむることあるなり。

蛛、其網を失ひたる時は何をか爲す。この動物の營々として勞することは相も變らざるなり。彼は直に再び以前の不堅固なる工事に着手し、つまりはそが生涯を此の結果少き工事に供するなり。しかして蛛が盲目的本能によりて爲す所のものを、人の子は智慧甲斐もなく之に倣ふて何時も自ら廢せざるなり。其虚空なる織物の破綻せらるゝ時あるも再び之に着手す。慾望のためにしばしば滅亡の淵に薄ることありと雖も、猶ほ之に懲りもせず懲々として所詮は之に捕へ去らる。且凡そ人の新に着手するてふ事は其は全く新なる事にはあらで、實は嚮に失ひたるものを少しく補ふに過ぎざるもの也。虚空の裡に經過せる青春の時代に歸りて新に復始むるは能くする所に非ず。虚空しき俗事を營みて失ひたる時を恢復するは不可能のことに屬す。哀れ人の子の世は斯くて終を告ぐ。此の時に至りて吾人は唯蛛網的織物をもて我が世を滿たせる事の愚なりしを思ひて痛悔措かざらむ。

是をもて主は虚空しき俗事に齷齪たる吾人に告けて曰ひ給はく、『先づ神の國と其義を求めよ』、(マトフェイ六の三十三)『爾曹壞る糧の爲に勞ずして永生に至る糧すなはち人の子の予ふる糧の爲に勞くべし』(イオアン六の二十七)『凡

て勞れたる者また重を負へる者は我に來れ、我なんぢらを息ません』（マトフェイ十一の二十八）と。人生眞正なる生活の泉は神にありて存す、是れ溢れさる所の生命の泉なり。そは又言はれて曰く『湧出て丶永生に至るべし』（イオアン四の十四）と。

人の日は草の如く、其榮ゆることに歸し、其有りし處も亦之を識らず、唯主の憐は之を畏るゝ者に世より世に至り、彼の義は其約を守り、其誡を懷ふて之を行ふ子々、孫々に及ばん、

詩篇第百二の十五―十八

十八

百合

子　如何なれは予は斯くも花を可愛く思ふなるよ。

父　そはおん身は小兒にて彼は亦花なるか故なるよ。小兒と花そは緣因淺からぬ言葉にぞある。おん身と花とは母なる自然の懷に宿る兄弟よ。見ませ、春を盛りに咲く此百合の花をば、今おん身は亦同じ年齡にあらずや。おん身の艶々しき縮毛、花の如き紅顏、清秀の眼目――ろは凡て暫しの百合なるよ。されど余がお身に語らずしく思ふは左の事にぞある。百合は凋み、おん身も亦老いつ。されはおん身には他の誡を要す、ろは花がおん身に敎ゆる所のものにして、おん身が若かる時にも老いての後にも生涯要するものなり、おん身は今此百合の花に就て記されたる福音書の章句を讀みてよ。

十九

子（讀む）「試に野の百合の如何にか長ずるを觀よ、勞かず、紡がず、然れども我爾曹に語ぐ、ソロモンも其榮華の極に於て、其衣猶此花の一に及ばざりき」（マトフェイ六の二十八——廿九）

《Посмотрите на полевыя лиліи, какъ онѣ растутъ?—Ни трудятся, ни прядутъ. Но Я вамъ говорю, что Соломонъ во всей славѣ своей такъ не одѣвался, какъ всякая изъ нихъ》.

* * * * * *

Consider the lilies of the field, how they grow; they toil not, niether do they spin: And yet I say unto you, That even Solomon in all his glory was not arrayed like one these.

父　充分也、坐りて余が語るを聞けよ。余はおん身に百合の種類をばさま〳〵の狀態もて說き示さんとぞ思ふ。植物學者は百合の花、色、葉、其他の特徵によりて其を三十二種に分ちつ。今おん身が眼の前なるは所謂外國の百合と稱へらるゝにて、そは花の名所なる遠き東の方より輸入せられしものなり、其の傍にあるは王城の百合とて人々の愛づるものなり……されど我等は今そが種類と名稱とを深くは問ふまじ。おん身は今此の章句を讀みもて、主が此の花の美を賞讃しつ、賢きソロモン王が綺羅にも優りていや尊くいや高きを語り給ひしを知りたるならむ。

子（讀む）、試に野の百花の如何にか長するを觀よ！　あはれ主よ百合の花を見る度毎に此花の愛らしさと、聖言の懷かしさとは我が心の中にいや增りゆくなるよ。

父　されは我が兒よ、暫し待て。そも百合は艶に麗しき白妙の衣を裝へど、こは神の斯く衣せ給ひしものにぞある。げに白妙の花に匂

ふ百合の野――王城に、優しく、美しく波の漂ふ時、そは一層しとやかに、床かしく、ソロモンの裝にも似たるかな。又杯の如く開きたる其花瓣の端の外れかへりたる狀は宛がら縮髮の如かるなり。しかして百合は他の快活なる花の如く徒爾なる安逸と人の手數をも好まで、暖國にありては自然に、園、野、谷間に生長ちて各々美を競ひ、時としては只太陽と天空のみ見ゆる邊りに生立つなり。百合の花瓣は宛がら祈禱者の如く絶へず仰ぎて天に向ひ、日中は宛も亦幼兒の己が掌を母に伸へたらん如、そが葉をば太陽に伸べつゝあるなり。斯くて又百合は朝な夕な月と星との宿る空を仰ぎ見つゝろこより露の降るを待つなり。

子　露と百合とは何の關係あるべき。

父　露は百合の含める馨よき液に混りてそが瓣に爽けき雫をそおく

然る時技術家――蜂の飛び來りて好みてろが花瓣に入ること宛がらおん身が今其目を百合に注ぐと同じかるなり。しかして蜂の花瓣の内に轉輾するは宛がら又おん身が搖籃にころがるにも似たらんめり蜂はろが雫を吸ひ取りて己が蜜にと携へ去るも百合はろを悲しとはせじ。己が寶の芳香をば蜜工事の機敏なる工師に分つを吝しとはせぬなり。その花瓣は終始開け放ちてぞある。……予は如何に說明しなばおん身に解し易かるべき。見ませ、蒸ばしの氣は煙り立ちつゝあるを、そは寧ろ流れつゝありと言はんこそよけれ、朝な夕な風は己がしいに吹き渡りつ。されど我等はその風の『何處より吹き來り、何處に去るやを知らざるなり』(イオアン三の八)

風は百合と戲遊ぶを此上なき娛としつ、花瓣よりろが魂魄を携へ去りて空中に撒きちらす。馥郁たる百合が香の籠れる空氣は凡ての

食物よりは甘く、人は己が生命と健康と快樂とを汲ひ取るなり。此は是れ百合が造物主を讃め頌へて他人に頒つ感謝の禮物にぞある。

さても亦百合は如何にして生長ち、如何にして衣るやを見ませ。是れ自然の百合なり。そが花の一つを擇みて、もぎりとれ、我が兒よしかて惜まて花英の底を伐り放てよ……今やおん身の百合は何に似たりと覺ゆるぞ。

子　百合は華かなる冠に似たりとこそ。

父　さなり、そは冠とも稱へらるゝぞよ。

子　若し此の百合の花瓣の散りたらんには予は之を福音書の内に―敬愛すべき救世主の御言葉の間に挾み置かんとぞ思ふ。

父　善哉。百合はおん身に神の言を說明し、神の言は百合を說明せむ。ソロモン神殿の構造を記せる列王紀を繙けよ。おん身は其書に一種他の百合を見出すべけむ。抑も百合の形狀の麗しきは、自然界に模型を採れる古代の藝術家が近代の人よりも尙ほ百合を以て其壯麗偉大なる作品の模型とせるほどなりき。されば古代の藝術家は百合を像りて冠冕、花瓶、又は殿の柱の上部を飾りにき。ヒラムは實にそが藝術の巨擘なりき。……聖書の其人に就きて証せる節を讀みませ。

子　（讀む）爰にソロモン、人を遣はしてヒラムをチールより召び來れり、彼はナフタリの支派なる婆婦の子にして、其父はチールの人にて銅の細工人なり、ヒラムは銅の諸の細工を爲す智慧と慧悟と智識に充ちたる者なり。金銀、銅鐵、木石の細工および紫布、青布、細布、赤布の織法に精しく又能く各種の彫刻を爲し、奇巧を凝して諸の工をなすなり（列王紀上七、十三、十四、歷代史畧下二の十三、四）

父　諸の工に巧みなるヒラムはソロモン王の神殿に二の銅の柱を建てにき。此の慈くべき巨柱は神殿の裝飾となりつゝ曾て世界の七不思議の一に算へられにき、奇巧を凝して諸の工を爲せる聖書の所謂智慧に充ちたる藝術家も、百合より外又善美完きものに思ひ當らざりしなり。彼は麗しき百合の花に慣れつゝ、そが形容に應ひたる二の銅の柱を鑄りて、奇柱をば世界の冠たらしめんとぞ思ひ立ちたる也。列王紀に『柱の上にある頭は四キュビトの百合の形にして（同上七の九十）とあるを見ませ。ヒラムは更に又神殿に巨大なる花瓶を鑄りたりき。聖書にそを言ひて銅の海と呼べり。銅の海には二百石乃至三百石の水を容るゝにて、ろをば十二の銅牛にて支へられ、東西南北各々三頭を配置せるなりき。巨大なる此の花瓶は亦同じく彩かなる百合をもて像り鑄られたりき（同上十九、歴代史略下四の五）見ませおん身の愛づる百合が

如何に多く造物主の神殿に像り鑄られしかを。此は藝術上の百合なり。今や我等はソロモンの雅歌を讀まん。それには又百合が吾人に一層重要なる教訓を示すなり。

子（讀む）

父　おん身は雅歌の神と教會との關係を歌へる理由を知らざるべからざるなり。主は斯くして教會と相語り、又同じく眞正なる基督教徒と語り合ひ給ふなり。しかして主は己をば教會の新郎と稱へ、又兄弟と云ひ、朋友と呼び、其他幾多吾人の心靈に貴き價ある名をもて稱へ給ひにき。ろれと共に教會は新婚、姉妹、朋友、近者又は眞の友と稱へらる。斯くも神聖にして貴き緣因――恩寵の契を言ひ現はすにおん身の愛する百合をば用ゐらるゝなり。主も教會も共に己が貴き愛をば百合をもて代表とせらるゝなり。讀みませ。

子（讀び）われはシャロンの野花、谷の百合花なり（雅歌二の一）

《Я нецветок полевой, Я лилия долинная.》

I am the rose of Sharon, so is lily of the valleys.

此は如何なる意味なるべき。

父『我は野花、我は谷の百合花なり』此は教會が己が主に語れる言葉にぞある。若しおん身の靈魂も亦た百合の如く潔からんには贖罪主に向ひて斯くぞ語り得ん。神の百合は世の荊棘の間に生長するが如く教會も亦地上に生長つなり（同二の二）主は此の百合を植ゑ給ふてそが中に信者の靈魂を護り給ふ。神は百合の間に獐を牧ひ給ふ如く、信者の靈魂をば教會の間に牧し給ふなり（同上二の十六、三の六）しかしてそれらをば百合の如く神の園に集め給ふなり（六の二）抑も百合は神聖と潔白との象、又基督の馥郁たる教會を飾る神靈上の完き象なり。預言者オシヤの書の末章に、神は己が民又は教會に幸福なる未來を約して曰ひ給ふらく『彼は百合の如く榮えん』と。此は如何なる意味にてあるぞ、それは則ち教會が天上の光榮と尊嚴とをもて盛り、神の恩寵をもて芳はしき香を放つの意と知らるゝなり、『百合の如く榮ゆ』（四の六）主は教會の愛なり望なり（雅歌五の十六）主が教會を愛て給ふの聖旨と攝理とは何をもて表現はさるゝや、そは亦百合にあらずや。『その頰は薬はしき花の床のごとく、香草の壇のごとし、その唇は百合のごとくにして沒薬の汁をしたゝらす（雅歌五の十三）と。斯くぞ教會は贖罪主の仁愛を歌ひ奉るなる。

子　予は今聞き且此の美しの百合を見ていやます〳〵神の恩愛と教會の恩愛を感じ行くなり。

父　善哉、我が兒よ、主神はおん身を祝福し給ふべし。さても余は

おん身に百合に就ての聖書の諸處を示しぬ。又百合の自然と、藝術と教會との關係とを樣々に示しにき。今や進みて神の賜なる此花が吾人に與ふる教訓に心を注ぎもて研究すべく要す。おん身は聖うして優しき德の狀を百合に認むなるべし。百合はおん身の鏡に下の如く語るものゝ如きぞ『我は白雪のごと白し、おん身も亦その靈をば光明潔白ならしめてよ。我は隱すなく、掩ふなく、欺くなく、公明に生立ちてける、おん身も亦公明正大もて正直質朴にあれかし。我は絶へず天を仰ぎつゝ己が頭をば内に向けて俯すなり、おん身も亦そが頭を祈禱に伏せつゝ、靈魂をもては終始至聖至愛の神の在すなる天の靈座を凝視りてよ。我が許には天より露降るなり、若しおん身も我が朝な夕な天の露を仰ぎ待つ如からんには、主の恩寵は必ずや天より來り臨むべきぞ。我は己が香と雫をば渇望のものに分け與ふなり、おん身も己が才能と勞働と所有とを兄弟に頒ちてよ。そよ吹く風が我が耳に語くがごと天使もおん身の靈に朝夕語るを願ひてよおん身若し善良にして情けある人ならんには、天使はおん身の德を神の前に善く語るべけむ。我は藝術の模範となりぬ、我が形狀はソロモンの麗しき神殿の飾となりぬ。おん身亦基督の教會にありて敬虔と正直の範となり、おん身の言行をして兄弟間の鑑ならしめてよおん身は我を見て如何に主が其の教會を愛し給ふかを別けても記憶すべきぞ。しかて眞正なる教會が主を愛する如くおん身も亦全靈を盡して己が主を愛て奉りてよ』と。我が兒よ、おん身若し百合が教ゆる所を躬行したらんには、それこそは神が天に於て善者に冠らしめ給ふ榮冠の像と余は確信するなり。

子　神は此の冠をば予が頭上に授け給はんことこそ願はしけれ。し

かはあれど予は百合に對して愧なきを得じ、そは百合は自然と成長しつゝ、安逸と姑息とを忌み、人の訪るゝをば好まざるなれど、吾等かよわき兒らは他人の煩となることのみぞ多し、父母は養ひ師は教へ給ふ、さはれ我が進みは如何に、果して進むことの多かるべきか、何れの日にか立まさりて進み得んことにや。

父　力をな落しそ。百合はおん身をば失望、憂愁、怯懦に導かむとはせぬものを。反ておん身をして天の父の仁愛なる攝理を信じ且樂ましむるなり。百合は勞ず紡がざるなれど、おん身は日夜堅き心もて祈禱に勞しつゝあるならずや。そも百合が人知れず靜に生長ゆく如、おん身は時より時に、日より日に、年より年に、善行の絲を紡むべきぞ。神はおん身をして神の人として成長て給ふべし、又天上の生活に甘く熟さしめ給ふべし。おん身の手にある百合は如何なるものにぞ。救世主の語り給ひしごとく、今日野にありて明日爐に投げ入れらるゝ果敢なきものに外ならねど、しかも神は斯かる微小の草にすら父が子を思ふ心のごと心配り給ふなり。神は百合を育て且つ裝ひ、露をば降し、日をば照らし給ふなり。なんとて天の父がおん身を忘れ給ふことやある。若しおん身にして天の父の聖旨に從順ならんには、いかてか神はおん身が心靈上の進歩を顧み給はてやあるべき。

子　（讀む）『試に野の百合の如何にか長ずるを觀よ、勞かず、紡かず、然れども我爾曹に語ぐ、ソロモンも其榮華の極に於て、其衣猶此の花の一に及ばざりき、今日在り、明日爐に投げらるゝ野の草にも、神は斯く衣すれば、況や爾曹をや』。

父　御身は其をよく心に留て、御身の百合が與へたる教訓を忘れなぞ

黒一點の豆大球

主や爾の作業は何ぞ多き、皆智慧をもて作れり

地は爾の造物にて滿ちたり（詩篇百三の二十四）

吾人若し天上に燦爛たる群星の一に昇りて、靜座沈思もて彼の廣々として運轉り行く地球を遙に眺め遣らんには、そが太陽と大小群なす衆星の間に紛れ行きて、疾くには見取りかたなき黒一點の豆大球に外ならず思はるべし、されど造物主は此砂粒の如き地球をも宇宙の際涯なき空間に於て忘れも見捨てもし給はざるなり。

父たる智と善とを具し給ふ神、造物主は、そが高遠なる叡慮を垂れ給ひて、吾人人類に賜ふに奇しき棲處をもつてし給へり、其處には人と人の用に供せられたる動物とか要求する一切の需用を完備せられつゝ。

地球は太陽と適度の距離に位置を取りて、地上の生者に要する光明、温暖を與へられ、晝夜、四季、それ〳〵の秩序ある變遷を受るなり。若し夫れ此等の循還にして絶へず目覺めたる愛の攝理の手にて指導せらるゝにあらずば、地球は寒暖其序を失して生者立處に其命なかるべきにぞ。

我が地球は一分時毎に約四百六十二里を回轉すなり。しかも吾人はそが上に在りて何等の震動をも覺えず、又何等の響をも聽かてあるなり。斯くも地球は驚くべき速力もて天の蒼穹を回轉り行けど、人は宛ながら永劫搖きなき大磐石に泰座するならん如く、安然として眠り、食ひ、且働く。

若し地球の形狀にして斯くも圓ろからずば、光明と寒暖とは地に

其平均を保ち能はて、恐らく其が過半の部分には生者其跡を絶つらん。風の流通はいたくも遲鈍となり、水殊に海水はそが地角より溢れ出て、震動と壞崩とは強くも起り來ん。空氣は風にて新鮮にせらるゝことなく、到る處に不健康を醸しつ、而も恐るべき颶風の屢〻捲き起るありて田野をば掻きむしりたるべけむ。

地球の表面は幾多の陸地と海洋とにて掩はる。しかして海はなべての陸を合せたるそれよりは尙ほ大なる廣袤もて成り立ちたり。神の仁愛の手は、吾人が田野を灌漑するに要する濕を日々此藏庫より頒ちて止み給はぬなり。若し夫れ造物主の懇切なる仁愛は、雨を地に降さず、川又谷間の泉を守り給はずば、田野には一抹の青色をも見るべからざらむ。海を地球の低きに置き給ひし所以のものは、一切の河水をそこに注き入らしめつゝ、日々の蒸發にて減じ行く海水を補はん爲めの神の惠ところ知らる。若し水にして一切地に滯りて動かさらしめなば、此世は傳染病と死亡の巷となりて、ろがうたてさは如何はかりなるにぞ。

大陸は異種異樣の地層より成る。その組織はいとも巧妙にして其が表面はさま〻の形勢もて現はさる。或るは廣き谷間、或るは丘陵のうねり、或るは雲を凌ぐ高山大嶽、さては又人知れず湧く深山の岩清水、溪間涓々の小流、滔々千里の大河、此等大小の水は、流れ〻て到處に灌漑を配りつ海に入る。その激しきは山の高きより出て、猛く、その緩かなるは低きよりして裕かに、緩急さま〻に流れてそが威德並び行はるゝを見ずや。若し夫れ地に此匂配のなからんか、水は溜り〻て茫々の大湖を現ずるに至らん、さあらずも濕々しき沼澤隨處に起りて此世凡百の病毒そこに宿りやせむ。請ふ

更に山の或者を見よ、地の腹の中なる鬱勃たる火焔の爲めに、自ら氣孔となりて造次の地震をぞ防ぐ。吾人が建築用の大理石と雜多の石材とは地の下、左しもに深からざる地層の中より得らるべく、又吾人が生活の上に無くてかなはぬ金屬も亦そこに求め得らるなり。しかはあれど凡ろ地球上そが大陸を組織せる地層の中にありて、最も利益あり最も豊富なるは、吾人が蹈める足下の地層のそれならずや。其は泥土と風に吹揚げらるゝ砂埃、植物と動物の遺殘より成り立ちたるにて、萬の物はそこに腐れ去りて又ろこより回生り來る。そこは一切植物の櫃なり寢床なり。

堅牢こよなき我が地球も、叡智なる造物主よりして其が表面は、そこに生存する者の爲に必要なる性質を具せられたり。若然らずして地の表面は、現に在るよりは尚ほ緻密に凝りたるものならんには

芽萠かよわき植物は其根を地に張り得て止みなん、さはれ現に又見るよりは尚ほ疎にして柔かゝらんには、樹木は堅く地に立ちて其が繁殖を能くせんこと覺束なからむ。人と動物とは輙の餌のごと、絶へす泥濘に浮沈みしつゝあらんも如何に可笑しからずや。

さはれ萬の物に父たる天の惠の手は如何なる豊滿をもて地を祝福し給ひしかを心して見よ。吾人が足にて蹈める此塵土は美妙なる幾千百の植物もて飾らる。見ずやそが塵土は年々歳々、草、木、花、果實、及ひ緑蔭とをも掩はるゝを。此は皆人と動物との利益と快樂とに供へられたるものにぞある。

地は亦無盡の寶藏なり。堀りもて行かばゆくほど、そがうちには萬の富の秘め置かるゝを見るべけむ。さるにても不思議なるは其が幾千載を經ぬるも、絶にて老い果てたる氣配のなく、絶へす若うし

てそが中より吾人に寶物を貢くことにぞある。抑も天が下、地の上の萬の物は如何にぞ、皆古びて老ひ亡ぶるにはあらずや。之とは異りて地は年々そが面影を新にせられ、歳々新調の晴衣もて裝はるゝなる。

植物は山の上より海の底ひに至るまで、算へ盡くせず澤にぞ地に茂る。一種言ひ知れぬ奇しく美くしき毛をもて織りなされし毛氈の如くに滿地に敷きつめらる。なべて植物の三級喬木と灌木と草とには五万有餘の種類ありと謂はるゝに、なほしも世に知られざる新なる種類の、顯微鏡下に年々續々として發見せらるゝと聞きては、如何に其の澤なるに驚かざるべき。而も神は一々ろが保護を慮り給ふなり。見よ、時到りて植物桔れ果てんとするに先立ちて、各千百の種子を出してそが相續者を遺さしめ給ふにあらずや。人は彼等を我が建築に採り、或るは食物衣料に、或るは工事に用ふ。一言にて言はんには、一として無益の贅物とてはあらぬなり。

博愛に富み給ふ造物主は、此壯大なる植物界の盛宴に、凡天下の有りとあらゆる生者を招き給へり。見よや幾千万百の生者は、地を被ひ海と空とに滿ち充てるにあらずや。博物學者は一塊の土にも、一滴の水にも、生活の愉快を感じて活動する微小動作の微小世界を其が顯微鏡下に發見すと謂ふにあらずや。それ等動物界の組織、形狀、天性、習慣は皆全能なる神造物主の叡智と仁愛とを語りつゝ、默々たる自然界を激勵し、之を盛飾するものなれそれらの中には或るは人の食卓に供せらるゝ果敢なきもあり、或るは勞役に逐はるゝ哀れなるもあり、しかはあれ天の父の活眼は畏くも至高の天より皆平等に視凝り給ふ。彼の『神の工の第一なる』(イオフ四十の

九十）巨大の河牛よりして、微けくも二厘半に價せらるゝ小雀の一羽のそれすらも皆神の懇なる眷顧のうちにぞあるなる。しかあり神の活愛の眼は、或る種族の無益の繁殖も、強食弱肉の酷き亡狀をも許し給はて、宛なから『此まては來るべし、此を越ゆべからす』（イオブ冊八の十一）と呼ばゝりつゝ各〻それに處あらしめ給ふなりて

且神の造り給へる一切の自然界にありて、そが榮冠たり壯飾たるは實に人なり。人體の完備、直に立てる姿勢、品位ある働作、そが高き額、天に向ひて遠き地平に達する眼、是や皆高等動物たるの特點にあらずや。地に王者たるの特權を賦せられしも此高等動物を措きては他にあらざりき。人は固と赤裸々のかよわき身をもて生れおつるなれど、頓ては綺羅金玉を纏ひもすべく、世に恐るべき武器をも執りて起たん。若し欲しなば其か掌より雷電をも起し得べく、

猛烈なる動物はろが面を避け、凶惡なる獸もそが法の下には屈み、凡そ人に益ある動物を順從ならしむるは固より易々の事のみ。人の海を駛するは言ふにや及ぶべき、いかなる氣候の下にも住居し得べく、若し要すべくは天をも翔け、地にも入り、海をも潛ぐり得らるべし。人は其力に代ふるに枝術を以てして萬物の上に其主權を握るなり。曠野に吼哮くるゝ獅子も、天空を魔飛する鷲も、海の巨獸をも鎭め得べし。有らゆる一切の自然は此世の王者に貢する民の如く人に貢す。他一切の動物は唯無意識に其本能がまゝに動くなりと雖も、人にありては宇宙の眞善美とそか秩序とを意識し、尊き其靈性の中には造物主の全能、全善、全智の縮寫を宿せり。人のみは天命の慈悲に憬がれ、理性の明地に立ちて、伏して天父を讃揚するを爲す。人は正しく此自然界の靈長たり司祭長たるなり。

此廣大なる世界は仁愛豐なる天の父の、吾人々類の爲に心して創造し給ひし者にぞある。仰げば數萬百の光明蒼穹に輝き、俯せは爛漫たる百花の毛氈地に敷かれて吾人の目を樂ましめ、そが馥郁たる香氣は空に薫りて吾人が鼻を娛ましむ。穰々たる收獲は田に波立てり。かぐはしき百々の果實は樹々に垂る。麗しき花色の羽衣着けたる千々の禽鳥は愉快なる歌を奏つ。多々の動物は人に馴染みてそが強大の力と、皮と乳と肉とを捧ぐ。太陽は日毎に光明と温暖とを人の住家に齎し、風の流通は健康に要する空氣を新鮮ならしむ。……吁、人類の父なる神よ、爾が吾人に賜ふ仁愛は實に言ひ盡し得ざるかな。

斯くも此地は神の莊麗なる獻智をもて造り給へる吾人の住家なり人類を愛で給ふ天の父の手は之を造りて吾人に賜へり。さらば惠み深き天の父に對して我が一生を献ぐるは正しく我が感謝なるべし。此の豐かなる賜を味ひつゝ己が膝を仁愛なる造物主の前に屈むることを爲せ『爾等或は食ひ、或は飲み、或は何事を行ふに論なく、皆神の光榮の爲に行へ』(書十の冊一)

日は出ることと新朗が婚宴の宮を出づるか如く、喜んで途を驅ることと勇士の如し、天の涯より出て行きて天の涯に至る、物として其溫を蒙らざるなし。(詩篇十八の六、七)

天は神の光榮を傳ふ

諸〻の天は神の光榮を傳へ、蒼穹は其手の作爲を誥ぐ。日は日に言を宣へ、夜は夜に智を施す（詩篇十八の一―三）

聖ロィオアン說教

天は如何にして神の光榮を傳へんとはする、舌もあらず、口もあらず、聲もあらざるに如何にして其を傳ふるものぞ。そは唯そが外顯をもてするなり。試に天の朗麗、極大、莊嚴なると其が妙へなる文とを仰き見よ。幾十百代斯くありて斯く變りなう經來れるを見ては、爾も亦造物主の存在を敎ゆるそが聲を聞かざるを得さるべし。而して斯くも不思議なる事業を爲し終へしものに向ひて崇拜の念禁めんとしてとゞめ合へぬを覺ゆなるべし。げに高天杳として聲なきも、そが外顯は大聲號呼して吹きも止まざる喇叭のうれよりは高く響く。しかは言へ天は吾人が耳に語ると言はんよりは寧吾人が目にものの言ふとこそ言ふべけれ。言ひ換ふれはそは吾人をして一層明確に事物を知らしむる感覺を以てするなり。されば人は行くとし天を仰ぎ見て、到處にそが敎訓を汲み得べきなり。預言者の言ひにし『其聲を聞かざる民なく、所なし』とあるにても明かならずや。そは天の聲を解し能はぬ民とてはなく、地上一切の人は均しく其聲を悟り得べきを言へるなり。

天の諭旨を悟ると共に人は亦晝夜の聲をも聞き分くべきなり。「日は日に言を宣べ、夜は夜に智を施す」と。そもそは如何にして宜べ、如何にして施すか、不易の循環をもてするそれ也。宛ながら睦み合ふ姉妹の、父の遺產を分ちて何の爭も立てず、互に相愛でつゝ世を送

るらん如く、晝と夜とは一年を均しく相分ち、各〻已が範圍を守りて互に侵すことなからむやう心しつゝ、晝は冬に常より多からず、夜は亦夏に例よりは長からずして、百代斯くて千載亦しかく、各〻其分を守りて今古依然として時を違へざるなり。嗚呼爾若し仰ぎて天を凝視らば、いかでか元始にそが不易の境を立て給へりしものに驚かでやは得ん。貪慾なる者と他の善を妬む者よ、晝と夜との聲を聞きて其か平均を學べ。驕傲、不遜、上座を他に讓るを心せざる者よ、さは聞け、晝は夜に讓りて其分を越えじ、さるを猶は人に尊敬せらるゝをのみ願ひて、此を兄弟と相分つをせざるなり。

光あれ

神光あれと言ひたまひければ光ありき、神光を觀て善と觀たまへり（創世記一の三、四）

天地は既に吾人が目に慣れて異しとはせられざれ、然るに若し此宏大なる觀物が突然吾人が眼前に現はれ來らんには、恐らく人は驚殺せらるべし。

夜の帷幕が眠れる自然に覆ひかゝれば、全世界は宛から失望に葬むられたる寂莫の曠野と思はるべけむ。若し斯かる狀態の、定まれる時間よりも長くつゞきたらんには、人は造物主の怒に觸れて幽暗の谷に投ぜられしにあらずやと思ふならん。

而も天日、東の空を紅に染め出して、光線は神の使者として早くも此の幽暗を追ひちらせば、眠より醒めたる萬象は宛がら又甦生れる如き日を迎へて笑を捧げつ、造物主の手にて織られたる華かなる衣をば今日も亦着せらるゝなり。萬の物の色と形と影とはそこに現はる。殊に最も驚かさるゝものは吾人が眼にぞある。終夜暗みをもて閉されたる我が目は俄然天外の遙けきにも遙きて、遠き彼方の影をも近きに見るに均しからしむ。

自然界の斯かる華かなる光は、輕く、薄く、微かなる空氣の作用に基くものにて、こは萬の物に先立ち『神光あれと言ひたまひければ光ありき』(創世記一の三)てふ瞬間の創造なり。この微けきものは太陽の光線に振蕩せられて相觸るゝ時始めて光き、出づること宛がら燧石の鐵に衝りて火の花を散らすと同じかるなり。光も亦ろが元に於て微けきものなれど、さればとて亂雜なるものにはあらで、吾人はそを解剖し得べきなり。試に暗室に小き孔を穿ちて光線を導き入らば、眩き白色を見るべし。されど三稜鏡をそが孔に置かば、白色は代りて七色を映じ出づべけん。そが七色の綜合せられて白色となるも誠に奇しからずや。最高なる技術者はそを色々に配り合せて人の世をば樣々に飾り給ひてける。

神のたとしへなき智と愛とによりて吾人に惠まれたる此の尊貴なる賜の價は、若し吾人に此の光なくば永へに望なき幽暗に埋沒し去るべきを思ひやりても知らるべし。若し光なかりせば吾人が生命は如何に細りて如何に悲かるべき。若し探りて始めて事物を得、觸れて始めて危險を避くるが如き暗黑の日を送るべくば人の世は如何に淺間しくも果敢なきものよ。幸ひに我が世、光あればこそなべて

の不便と危険とは去られ、多々の便宜と快樂とは得らるゝなれ。吾人は只眼球の廻轉に依りて四邊凡百の物を見、遠き彼方をも見分くるを得べく、吾人が求めんとする一切は唯目の向ふ所に直に供給さるべくあるなり。汝旅行を要する乎、光は吾人が取るべき方向を直に目に示すにあらずや。自然の美、天の靜なる色、花の美くしき、動物の麗しき、如何に澤に愉快と趣味とを與ふるとぞ。人は此等の至大なる自然美をは『日を善者惡者に照し給ふ』(マトフエイ五の四十五)ところの造物主の寛大なる手より價なく享く。自然の要求を滿足せしめ、そが安寧と幸福とを遂けしむるに、唯白一色を以てして猶ほ足るべしと雖も、而も仁愛なる父は自ら足れりとせて七色の華かなる配合をもて自然を彩色し給ひて、ソロモン王が榮華の絶頂に於てすら其裝ひ花の一にだに及はざる絶高の美術を現はし給ひける。

若夫れ天は赤色又は白色の一色もて彩られたらんには、冬の日雪積む野は互に反射して人の目は痛くも惱まされん。若し又天は一色に黑からんには自然は陰鬱として慘憺たる象にてあるべけひ。一切の植物はおしなべて白、或るは赤、或るは黑、或は黃の一色に外ならずば如何あらん。額に汗しつ耕すべき地に絶へず目を置く人の不便やそも如何に。されは人の目の甲弱き器關を害はざる適宜の色は天の碧色と地の綠色なり。さればにや造物主も自然界に於て最も多く此の色を彩り給ひしなれ。見よや天には蒼穹廣ごれり、地には綠の毛氈敷き詰めらる、造物主の智慧は如何に偉大ならずや。人は坐しつゝも、歩みつゝも、止まりつゝも、仰きつゝも、見るは天地兩樣の此色ぞ。至微かなる人の瞳ひとつにすら造物主の大御心を注がせ給ひしことの大なるはげに測り難きものあり。天と地とは各己か

變りたる色もて人の目を勞はる。此の聖旨に於て仁愛なる天の父は更に人の世の片隅にすら又同じ色を置き給はず、或るは飾りなき所とては殘し給はて、種々の色彩を施し給ひけるぞ畏し。天は近け行く夜半の星のみかは、或るは紅さすてふ曙の空、或るは金色に漂ふ夕暮の空、或るは千々に綾なす雲の色、或るは奇しくも閃く電光、或るは優しの虹のかけ橋、など飽かぬ眺めの數々を盡くしつ。見よや地も亦華かなる毛氈敷きて、そをば蔽ひたる青草の無數の影を有するは、宛から無數の植物の色さまゝなるが如けん。

動物の衣の色は千差万別なれど、茲に心して思ぶべきとこそあれそは神の慧き計ひもて天の碧色と地の綠色とを動物の色より除き給ひしことにぞある。こは両者互ひに見分けかたなき恐なからん爲めとぞ知らる。次て見るべきは動物の各種類が、吾人の知れるか如く

皆それ〴〵の色もて別たれたる事なり。さればその色もてそが種類を見分け得らるべく、更に進みて見なば同じ種類の中に亦色により て小分けするを得べきなり。斯くも色の樣々に澤なるはろも苟且の業にはあらず、そは、至高なる技術者か一切の自然を娛ましめんとし給ふ大御心に出てしなる。

花の色と熟れる果實とは嗚呼それ如何に自在なる手の業ぞ。今日存して明日爐に投げ入れらるゝ（マトフェイ六の三十）はしたなき野末の花の一本にすら言ひ知れぬ趣を色に忍ばせ給ふ造物主の仁愛には誰か深き感動と感謝とを禁し得べけむや。更に又果實の熟る頃となればおのづと紅さして美しの樣となるは、そが甘き味をば色香にほのめかせつ人の心を惹き給はん聖旨とこそ知らる。

自然界に現はるゝ光こそは實に心地よき限りなれ。ソロモン王の

曰ひける、目は見るに飽くことなく、耳は聞くに充つること無し』(傳道書一の八)とは今此に假りて言ふべきそが美ならむ。しかはあれ物質的光は如何に美しかるとも、そは他日『義人が天の父の御國に於て日の如く輝く』(マトフェイ十三の四十三)てふ靈光の豫象に外ならざるものにぞ。主の弟子達はファオル山に於てそが微けき反照を見て、物質上の光は頓に打ち忘れつ、『主よ我等こゝに居るは善し』(マトフェイ十七の四)と悅び叫びにき。三重の天外に上りて人の言もては言ひ盡すべからざる言を聞きたる保羅も亦此の靈光を見たりき。聖金口イオアンは言ひぬ。『實に吾人の測り知るべからざるもの、即ち目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心未だ念はざるもの』(コリンフ前二の九)に至りては何をもて之を示すべき、之を解き示さんにはそが工夫を要す、悟る是なり』と。されど、或る聖牧師は自然の光を假りて未來の靈光を明かしぬ『一片の雲だになく晴れ渡りたるみ空の、そが榮冠を現はし、時に己が目をもて仰ぎ見よ、此の美はしき現象を見み樂みつゝ斯くて吾人が內なるものゝ住家も斯くあるべきを思ひ出てよ。否ろれにも優りていや美しかるを思に止めよ金殿の茅屋に勝るは言はずもがな、萬づ神の使と天の御國、天の父の寶座を思はゞそれ如何に。旗皷堂々たる陣營の勇ましの景にして爾の心を奮ひ起たしむべくんば、況して聖者の永久城を見ん時、(蓋し曰はる、爾を永遠宅に接んが爲なり(ルカ十六の九))と)又聖者の太陽よりも尙ほ光り輝くを見ん時、其心果して如何ぞや……さらば得るより幸なるはなく、失ふより損なるはなきぞ』と。

あしたの子明星よ、いかにして
天より隕しや。

以賽亞 十四の十二

幽微なる元素

杳として我が目には入らざる流動体の、そが性質の点より見ればいとも恐るべき破壞的のものなれど、造物主の創造の右の手は唯自然界の利益と便宜とに差向けられつゝ世界はそれに取り圍まる。然りそは萬の物に澤にして、水の中、空の中、地の中にも、果物にも動物にも人にも充ち滿てり。此の見るべからざる、或るは明々として輝くなる、或るは依然として搖ぎなき、或るは進み動くなる、或るは熱燒するなる、或は全く有るなきが如き此の流動体は地球上何處如何なる機体にも浸み入りて、その奇しきは氷塊の冷かにも、牢乎たる花崗石のうちにも充つ。萬の物之によりて生き、之によりて膨脹し、之によりて活動し行きつ、若し之あらずば萬有は癱瘓して

即下に死すべけん。抑も造物主が自然界の生育とろが豐滿との爲に創造し給ひし此の凡てに遍き幽微なる元素をば、吾人は概して温とぞ稱ふ。しかしてろが人の感覺の作用し來る時吾人はろを温氣とは謂ふなり。

温の重なる源は地の中心にありて存す。造物主はそこに永久消えざる温の藏庫を造り給ひしなり（イオフ廿八の五）こは尋常の實驗をもて猶ほ吾人をして信せしむるに足りなむ。試に寒き冬の日深き洞穴に入らばそが外面の寒氣凜烈として堪へがたきにも似ず、ろこには著しく温氣を覺ゆなるべし。こは又四季の別ちなく石坑又は鑛穴に於て同じ經驗を試み得ん。そは穴の深きにつれて温度いよ〳〵高うなりて、鑛石の採堀に役するものは、抗内の空氣を冷却せしめんが爲に方法をさへ廻すと聞ゆ。さらば今日に進歩したる人力をもて穿ちたるより

は更に進みて深く地を堀り下げたらんには抑も如何……

吾人が手をもて、目をもて、將器械の力をもてするも確とは見分けがたきこの元素は、彼の噴火山とそが作用とに由りて明に知らるべし。簇り立つ炎熱、巨大の烟雲、火塊の噴騰是や皆地の中に大火庫の存するを証すものにあらて何ぞ。これをもて人は常に噴火山の上に坐し若くは火の海を航するものと謂ふべきなり。唯冷土の數層ありて相隔つるのみ。さはれ若し神は此恐るべき魔力のそが自然的膨脹を制御し給はず、若くは神の憤怒によりて地の表皮の破壊せん曉には、哀れ此世は恐るべき火爐となり果てん。而もその日の必無なりとし得ざるぞ實に懼しからずや。曰く『それ神は其言をもて今の天と地を蓄へ、之を火に焚ん爲に神を敬まはざる人を審判する淪亡の日まて存せり』(ペトル後書三の七)と、又曰く『其日には天大なる響ありて去り、

體質ことゝ〳〵焚毀れ、地と其中にある物みな焚盡ん(同上一の十二)と。

しかはあれ人間の不義が未だ此の恐るべき主の日(同上三の七、十二)を招致せざる間は、火を包みたる此地球の内部は、一切の自然界に絶へず必要なる溫素の重要なる源なること宛から海は地に必要なる濕氣の藏庫なると同じかるなり。……

神の攝理の手は地心の寶藏より溫を運びて、萬有をしてそが樣々なる目的に使用せしめ給ふ。溫は大洋、海、川、泉に於ては流動の体にて保持さるゝなり。且そは間斷なく地の孔を潛りて嚴冬猶ほ水のろこひまても凍ることなからしめ給ふ。若し然らさらんには地上の植物は寸時も得堪へずして、此世凡百の物は彼の洪水の恐るべき狀と等しきに遇はん。されど神の攝理は自然界の需用に心を配りつ溫をして其が急激なる破壊力を逞ふせしめて、程よくも發散せしめ

給ふなり（イオフ三十七の十二）そが程よき膨脹をは全能の掌をもて保持し給ふは空氣の刷新と動植物の必要とに固る。しかて神の攝理は海にも地下の火にも同じく昔なからの言をもて曰ひ給ふらく『此までは來るべし、此を越ゆべからず（イオフ三十八の十一）』と。

萬物の靈長――たる人には殊に温の必要を感ずる多大ならさるを得ず。寒冷は人の軟弱なる支肢を凍えしむるも、ほとよき温度の存するありて人は活潑に働き得るなり。さあれ人は動物の具へたる防寒の毛衣は固より有せさる所、若しも大氣中の寒冷にして温度に過くる甚だ大ならんには、そは人類の爲に由々敷大事ならすば止まざらまし。而も亦神の仁愛のいと深き、そが缺乏をば豊に補ひ給ふなり。蓋は諸の動物の中、唯人には術を授けて火より温暖を採るの能力を與へ給ひたれはなり。又諸の業をもて己が凍寒を防きて苦痛を

免れしめ、尚一般に大氣の身に及ぼす樣々なる危害をも除かしめ給ふ。哀れ動物はそれとは代りて嚴寒一度び到れば或るは戰慄き、或るは痲痺し、或るは悶搔きて難みになやむなり。人の子は然かあらずして火をもて己が住家を温め、一年終に安らけく我が業を營む抑も神の吾人々類に火を賜はりたる所以のものは、そは人の建康と平和とを護る物料としてのみならず、尚ほ冬時の人の慰藉者としての賜にぞある。……

げに温は世に顯はれたる神の叡智と仁愛との至大なる恩賜の一つにこそ。造物主は温の源を地心深く秘めつゝ日に〳〵そが中より自然界の秩序と幸福とに必要なる丈を發散せしめ給ふ。斯あればとて地下の温庫の缺乏を告くるにもあらず。そは午中太陽の光線に誘はれて地中より發散せらるゝ温は、日沒すれば再ひ地中に回歸しつ夜

は日中の減少を償へばなり。しかて冬は夏の剰餘より償ふなり。

吾人は此に至りて義人イオフと共に、嘻、測る能はざる者、知る能はざる者（イオフ四十二の三）と言はむのみ。將又此聖者と共に膝を屈めて「太陽を義者不義者」（マトフェイ五の四十五）の上に一樣に照しつ、己が溫愛をもて一切の自然を溫め給ふ造物主の測りがたなき叡慮と仁愛とに感謝し奉らんかな。

晨光のごとくに見へわたり、月のごとくに
美はしく、日のごとくに輝き、畏るべきこと
と旗を揚げたる軍旅のごとき者は誰ぞや。

雅歌六章十節

蒼海の美

神いひたまひけるは、天の下の水は一區を匯りて乾ける土顯るべしと（創世記一の九）

聖大ワシリィ　說教

日和久しう打續きて藍碧一層染めなす海原の眺めこそは、げに心地よき極みなれ。清風そよろに吹き來りて千波萬波綾なす海の面は見渡すかぎり濃紫深碧の色ひろごりて、相接する陸をば輕く觸れ緩う搏つは宛から兄妹相抱いて接吻するにも似たらんめり、げに心地よきは海の眺めならばや。海は神の前に美を頌ふなり、そは海氣徐ろに來りて地中を濕せるなり。海は又美を頌ふ、ろは輝く日光に立ち昇る水の微分子は空際に宿りつ聽て冷ゆれば露となり雨となり泉となりて地上をば潤せばなり。海は神の前に美を頌ふなり、そは

みづから島嶼を繞り圍みて其が壯飾となり護衛となればなり。海は又美を頌ふ、そは遠く相隔てし大陸をは聯ぎ合せ、航海者の交通をば自由ならしめつゝ吾人に未知未聞の報道を齎し、商事を般ならしめて吾人が生活の滿足を得るに易からしめ、富める者をして能くその餘贏を散せしめつ貧き者にはそが不足を補はしむればなり。

凡そ水を談ぜんには「宜しく水は一區を匯るべし」てふ太初の言を忘れざるを要とす。その流るゝや性に順ふて低き地に就き、頓て窮る所に到れば己が不動の位置に留まりて復傾注することなき水は、當に然かあるべきことなり。曰く「天下の水は宜しく一區を匯べし」と。こは是れ此世一切の水が、其の本來の界を流れ出てゝ、澎湃として我が乾げる地の全面に漲らざらん爲に一區を匯るべく命ぜられたるにぞある。されば風に激して怒濤山なす海も、一度び岸に觸れては

そが奮迅の勢頓に失せて哀れ一片の泡沫と散り行くなり。「主曰く汝等われを畏れざるか、我が前に戰慄せざるか。我は沙をおきて海の界となす（イエレミヤ五の二十二）と。崩れ易き沙をもて海の支ふべからざる壓力を制す、噫！

夫れ神の前に顯はるゝ海の美觀は、吾人の得て描寫し能ふところにあらず。抑も又海の、神の前に美を頌ふる斯くの如にして亦斯くの如く賞嘆せらるべくば。まして老若男女相和讃して、宛から岸うつ波のごと神に捧ぐる聖堂の祈禱は、それ如何ばかり高尚の美觀なるぞや……

人は何物

ニッサの聖グリゴリイ　説教

如何なれば人は萬物の後に造られしや。

世界創造の工は己に全く竣りぬ。摩西曰く「天地及び其の衆群成く備はれり」と。而してそれ等は皆おの〳〵相應しき粧飾を受けしなり天は飾るに光明をもてし、海と空中には泳くもの飛ぶものをもて充し、地は被ふに萬種の草木と類滋き牧場とをもせらる。こは地に賦へられたる勢力のなせる一瞬時の業なりき。又華かなる生物をもて充たさる、綠の野は成長べきさま〳〵のものて飾られ、巖石、山巔斷崖絶壁、山谷、は又さま〳〵珍らしき草をもて衣せらる。これらのものゝ地に生ひ出づるや否早くも圓滿なる美を備ふ。萬の物は皆

欣喜して自ら處り、生を受けたる動物は或は類を分ち群を爲し嬉々とし林を驅け廻り、木陰深きあたりには、禽鳥聲を揚げて鳴き合ふなり。海の形勢に至りては更に麗はし、淵の淵たる處は靜けく平けく、岸には自から口門開きて海と陸とを結び、風清らにそゞろ吹き來れば、小波綾に立ちて宛ら綠の野面のゆらぐが如し。一言をもて言はんに、海陸の珍已に備はる、唯それ之を樂むもの未だあらざるなり。すなはち未だ世界に至大卓越の造物たる人はあらざりしなり。ゐは管理者たるものゝ、支配すべき財産に先立ちて現はるゝは理に非ざればなり。國領定つて王者自ら位に涖むは至當にして亦自然の道なればなり。さるが故に萬有の創造者は出てゝ地に王たらんとする人の爲に、豫め其王宮の如き者を備へ給へり。海と陸と嶋とを以て地を備へ、空を張りて天を備へ、萬づの珍寶悉此の宮殿に在

りて存す。そは感覺と生活とを賦與せられたる一切の動物、樹木、草菜の社界と、金銀寶石其他、人の尊重する所のものを謂ふなり。此等夥しきものは恰も帝王の寶庫に藏めらるゝが如く地の懷にあり斯くも一切全く備はりたる後、世界に奇蹟の觀察者として、又地上幸福の主人として、神は人を自然界に入らしめ給ひたり。されば此天與の福樂を娛みつゝそが恩惠者を永へに記憶せざる可からざりき又自然の美を視ては言ひ知れぬ造物主の大能を仰ぎ見ざるべからざりき。嗚呼是れ人の萬有に後れて造られし所以なる哉。そは下賤なるが故に非ず、一度び世に出づれば直に己が從屬たる萬物を支配せざるべからざるに因る。善く客を待つの主人は豫め膳を調へずして は招待することなかるべし。我が富貴鴻恩なる家君——神は先づさまゝに麗しく其室を裝飾し、快樂溢るゝばかりの盛宴を調へて後

人をして入らしめ給ひしなり。是れ人をして求むる所に勞せしめず備はれる所に樂盡きざらしめん爲なり。しかして神は其樂を完からしめん爲に人の天性に靈形二方面を具せしめ給へり。そは神に屬すると地に屬するもの是なり。神に屬する性をもつてしては神に於て樂み、又感覺の性に於ては地上幸福をもて樂みを享んか爲めなり。

人は賦するに王權を以てして造られたり。

凡そ技術家は要用に應して作品を出すが如く叡智なる技術者も亦統御者たるに相應しく吾人が本性を造り給ひしなり。吾人が心靈には此くの如き本能を賦し、身躰には亦此くの如き容儀を與へてもて統御の任に堪へしめ給ふ。王者たるの威嚴としては超物質なる靈魂を有し、靈魂を卑屈奴隷より免れしむる自由は、是れそれに自主の權を與へられたるにて、如何なる强制にも屈從せずして獨裁權をも

て我が一己の意思を支配するを以て知らるべし。斯かる性質は王者にあらで誰にか屬すべき。しかして萬物統轄者たるものには亦それにふさはしき容儀を要するにあらずや。帝王の尊影を寫す者は先づ顏面を畫き、然る後之を被ふに紫衣を以てして其權威を表現すべし描き終れは見るもの直に皆王なりと言はんとす。萬有の王者の肖像として萬物を統御するが爲に造られたる人の本性も亦それに應はしき威嚴を備へざるべからず。されど其威嚴は紫衣をもてはせられず如何となれは帝冠は必ずしも王尊の表號とはならず（而も亦吾人が原像たる神も之を有し給はざればなり）乃ち飾るに帝衣よりも高尚なる善行美德をもてし、幸福なる不死無終をもて帝笏に代へ、其頭上には義の光ありて帝冠に代へられたるなり。

神の肖像は人の何くに存する乎。

人の屬神美は其外形にあらず、又其面貌の艶なるか故にもあらずすなはち高潔なる性格に對象して賜與せらるゝ名狀すべからざる福樂に在りとす。ろも畫工が人の肖像を畫かんとするや、原像と同樣なる彩色を施して以てそが眞相を描寫すべし。造物主も亦人が色料を用ゆるが如く善行美德をもて自己の美に似たる肖像を吾人に描きて以て自己に存する權威の狀を表現し給へり。しかして吾人にその眞像を描寫し給へる顏料は種々なりと雖も、之に紅色も光彩も其他の間色もあるにあらず、又其眉、眼、其顏面の凹處を描寫する所の暗影あるにあらず、然れとも之に代へて清潔、無慾、快樂、無邪氣其他之に類する美德をもてし給へるなり。神は斯くの如き彩色をもて吾人の靈性を飾り給へり。若し願はゞ爾は人の靈性に描かれたる

屬神美の他の彩色をも見るを得べく、又吾人の中に神の肖像の存するをも見るを得べけん。夫れ神は智なり言なり。聖書に言はずや『元始に言あり』と。又使徒保羅曰く『使徒は基督の智を己に有す』と而して此の二者は人に存するにあらずや。爾は自ら眞の智、眞の言の肖像たる爾の智と言とを見るべきなり。しかして又使徒約翰は『愛は神より出し、神は愛なり』(イオアン第一、四の十六)と曰ひぬ。神は斯くの如き性質を吾人の靈性に賦し給ひしにあらずや。救世主曰ひ給はく『爾曹若し相愛せば之れに因りて人々爾曹の我が弟子なることを知るべし』(イオアン十三の三十五)と。さらば吾人にして若し相愛することを缺かば是れ我が中に存する神の肖像を破壞するものならずや。又神は見ざるなく、聞かざるなく、鑒ざるなきなり。しかして爾は眼と耳とをもて萬の物を見聞し、物の性質を研究する智慧を有するにあらずや。

髑髏

人々之を葬らんとて往いて見るに、腦骨の外何もものをも得ざりき(列王記略上九の三十五)

此の髑髏は恐らく或る豪傑の戴きしものならむ。そは赫々たる偉業をもて全世界を輝かし、その名は人の口より口に傳はり、日の東より西に唱へられつ、或る者は大なる尊敬と隨喜とをもて、その人物を談じ或るは筆にものせるもあらむ。亦或る一方には嫉妬をもて其人物を物色せるもあらん。今や其人如何。髑髏は空なり虛なり、時は沈默し、史は破れて讀む可らず。豪傑の頭に宿りし一切は唯髑髏のみ名なく遺る、げに『彼より腦骨の外何ものも得さる』かな。

此の髑髏には恐らく或る高名なる哲人の高尚なる思想の集中せられしものならむ。將崇高深遠なる思索の織り出たされしものならむ

哲學上の問題は思考せられ、而して之に對する深遠なる解決の案出せられしものならむ。此の髑髏の中には恐らく英才と稱せらるゝものゝ置かれしならむ。しかも今如何に。髑髏は全く虚なり空なり。

此の干乾びたる髑髏は、恐らく或る富者の所有なりしやも知らず、そは聖書中の富者の如く豪奢に生活し、ソロモンの如く榮華に着、金殿玉樓の裡に流連の快樂をもて日を送りつ、而も華美極りたる宮殿をもて華美ともせず、宏壯を盡せる樓閣をもて宏大ともせざりしものならむ。今やその髑髏は全く空なり虚なり、一杯の土にも覆はれじ。

此の髑髏は恐らく飽くを知らざる功名心の邸宅なりしやも知らず、しかして其功名心は勤勞より功績を放逐し、或るは破壞し、何處何種の事業に就ても自己中心を

專一とし、若し何人か己が上に立つを見れば自ら嫉するを得ずして食も喉を下らざるなり。しかして勳爵と位階とを以て塡充されたるなり。今や彼は全く空虚となりて何人の敬白をも博せず、同墓地に轉かれり。

此の髑髏は誘惑的の粉飾と華美とをもて滿され、其美は衆人の心目を眩まし、自らは揚々として得意を極めたるならむ。されど今やそれ如何。髑髏は全く空虚なり、人は鼻つまみす。……

恐らく此の髑髏は事業家の男兒が所有たりしならむ。日夜孜々汲々として公私の事業にたづさはり、一身を之に献げて活動しつゝ、終始『未だ結局に至らじ』と口にせしものならむ。然るに今や其人は全く空虚なる髑髏なり。恐らく……

されど此の髑髏が何人なりしかを知らば吾人に何等の利益あるべ

きや。ろを知りたればとて奮に復するにもあらさるにあらずや。さらは敢て問ふの要なかるべきか。否今やそは生存者の爲めに心靈上趣味深き教訓者として存するなり。過去の虚僞不安に代へて完全なる安心と立命とを己が現在の運命を以て描けり。世が貴ふ所のものを勇敢に、大膽に、輕蔑する決心を明白に表したり、生者の心を誘惑する者に對する賢明なる無慾を印したり。沈重なる思想は鮮かにそれに泛びたり。而も此の思想は現世のものにあらす、又地上に關連するものにもあらす、又地上に就ての思想にもあらす。呼死せる髑髏の賢き安泰を羨む所の生ける髑髏を有する人間は世に幾人ぞある。

青年苦行者が聖マカリィに問ふに、

父よ、如何にせは救を得べきか、願くは教へ給へ。

神の人は答へて、

墓に往きて死者を讃めよ。

青年苦行者は墓に往きて長らく頻りと讃めぬ。

マカリィは向ふに

何と言ひし。

何も——

賢き老翁は、

復往いて死者を惡口せよ。

青年は往いて惡口し、死者の乾びたる骨に石を投ぜり。

老翁は又語を次いて、

何と言ひし。

何も——

と、青年苦行者は答へたり。

マカリイの曰ひけるに、

爾若し救はれむとを欲して己が生命を失はざらひと思はゝ、死者の如く生活せよ。譽めらるゝも誇る勿れ。惡口せらるゝも恐るゝ勿れ、默して忍べ、慾の肉体に於て無慾たれ、而して死者の髑髏の如く善に堅固なれ。

死の海

昔は乳と蜜のしたゝりて、今は神の民の罪惡によりて不毛の荒野と變り果てし契約の地は、げに悶えにも痛ましの名殘なるかな。殊に死海とろが沿岸の地こそは世にも慘憺の極みなれ。海に一介の生者をも養はざる死の作用は、飽までも神の咒の恐るべき現象をば示すなり。神の正義は曾て十個の義者を求めし罪の惡の惡城に襲りつ漕手の楫も推すなく、嘯く風にも進まで唯永へに眠りて死せる水面をば眺め遣る旅人をして、そゞろ嗟嘆の聲あらしむるのみ。たゞそこに流れ入るイオルダン河とケドロン川のみぞ稀にも瞬間ろが悲しき面を慰むれど、それすら辛き鹽水に呑まれては早や跡だに止めず。

沙多く坡多きそが周邊は、死せる不動の此の海に準じて綠せるものとては一株だにあらぬなり。海面より蒸發し來る瘴毒は遠く距てし地方の植物をも枯らしつ、只稀に「ソドムの葡匐樹」(復原律例三十二の三十二)一のみは生を保てるを見るのみ。そすら只房の美しう見ゆるのみにて苦味をば帶ぶなり。

若し旅人にして死海の荒涼たる附近に人の家の墟趾を探らんとす

るもそは益なかるべし。神の怒に觸れて永へに荒凉を極むる此地に人は更なり動物すらも己が棲家を構ふるは敢てせじ。時としては只曠野の間に散居する亞剌比亞人『其手は諸の人に敵し、諸の人の手はこれに敵する』(創世記十六の十二)ところのイズマイルの子孫が心なきの旅人を見遣りつゝ彷徨ふを見るのみ。或るは聖書上の紀念に誘はれし巡拜者の一群が死海附近の荒寥たる風物に、ありし昔を忍ばんとて特更に耶路撒冷より來り見ることあらんのみ。一言もて言はゞ、そも心靈上の生命の泉の涸れたる地には、草木も亦死して花咲かずてふ眞理を永へに其處に立証するかの如く覺ゆ。

此の憫むべき地には何時が代にも萬の物斯く死して人の住むこともなかるべし。……然り而も此の地ころは曾て大なる都と邑の栄ゑし所、豊けき牧場と麗しき園とありて時人は之を神の樂園と稱へし

なりき。創世記の記者はロドのアウラアムに別るゝ節に言へけらく『是に於てロド目を擧げてイオルダンの低地を瞻望みけるに、エホバソドムとゴモラを滅したまはざる前なりければ、ソドムに至るまで普く潤澤ひてエホバの園の如く、埃及の地の如くなりき』(創世記十三の十)とあはれ神の園とさへ歌はれし豊けき此の地は、見る影もなき漠々たる不毛の荒野と變りぬ。神はアウラアムに語り給ひて曰く『ソドムとゴモラの呼號大いなり、又其罪甚だ重し』(創世記十八の二十)と。是より幾日の前、イサークの出産につきて著しき神の約を被りしアウラアムの光明なる希望は、將に不敬虔の都に臨まんとする災厄をもて暗まされぬ。哀れ義人は神の正義に訴へて罪人に代り祈りぬ。創世記の記者は吾人に神とアウラアムの趣味深き會話を傳へける。神が罪人を忍び給ふの如何に深きか、そも又世の興敗は何に由來するなるか、そ

が秘密は此の一場の話上に示されぬ。『義者を惡者と俱に滅したまふや、若し邑の中に五十人の義者あるも汝尙ほ其處を滅し、其中の五十人の義者のために之を恕したまはざるや、爾斯く爲して義者を惡者と俱に殺すが如きは是れあるまじき事なり、又義者と惡者とを均しくするかごときはあるまじきことなり、天下を鞫く者は公義を行ふべきにあらずや。エホバ言ひたまひけるは、我若しソドムに於て邑の中に五十人の義者を看は其人の爲に其處を悉く恕さん。アウラアム應へていひけるは、我は塵と灰なれども敢て我が主に言上す、若し五十人の義者の中五人缺けたらんに、爾五人の缺けたるために邑を悉く滅したまふや。エホバ言ひたまひけるは、我若し彼處に四十五人を看ば滅さゞるべし。アウラアム又重てエホバに言上して曰ひけるは、若し四十人看なば如何。エホバ言ひたまふ、我四

十人のために之をなさじ。アウラアム曰ひけるは、請ふ我が主よ、怒らずして言はしめたまへ、若し彼處に三十人看えなば如何。エホバいひたまふ。我三十人を彼處に看ば之をなさじ。アウラアム言ふ我あへて我が主に言上す、若し彼處に二十人看えなば如何。エホバ言ひたまふ、我二十人の爲にほろぼさじ。アウラアム言ふ、請ふわが主、怒らずして今一度いはしめたまへ、若しかしこに十人看えなば如何。エホバいひたまふ、我十人のためにほろぼさじ。(創世記十八十三―十一)と而も繁華の五都を擧て十人の義者を得る能はざりき。只ソドムのロトのみ其が少數の家族と共に義者の一に數へられて辛ふして滅亡を免れしのみ也。蓋『此の義人は彼等の中に居りて其不法の行を見且聞き、日々其義なる靈を傷めたるなりき』(ペトル後二の八)『ロト、ソアルに至れる時、日地の上に昇れり、エホバ硫黄と火をエホバの處より即天

よりソドムとゴモラに雨らしめ、其邑と低地と其邑の居民および地に生ふるところの物を悉く、滅したまへり」(創世記十九の廿三、四)斯くて亂淫の五都城はそが住民と財産とを擧げて火に附せられ、そこに一物とては遺らざりけるなり。智者ソロモンの言をもてすれば「烟立てる地はそが虛僞の証として虛空を遺れるのみ、果實を結びたる樹は時と共に枯れ、懐疑の雲は鹽柱を名殘となして直立せり」(箴言十の七)と。神の命に背き後を回顧りて鹽柱と化したるはロトの妻なりき。そは時劫のそを敗らざるまでは死海の濱に淋しく立てる看守者として數代遺存りにき。

「ソドム、ゴモラ及び近隣の諸邑、此と同じく淫亂を行ひ、異色を縱にせし者が、永遠の火の刑をうけて、鑑戒と立てられし如く」(ユダ一の七)此の世末期の日も亦斯くやあらむ。「其日には天大なる響ありて逝り、体質ことく〳〵焚毀れ、地と其中にある物みな焚盡きん」(ペトロ後三の十)ロトの日に當たりて不道の甚しかりしかごとく、末世の日にも亦然るべけむ。「ロトの日にありしが如く、人々食ひ飲み、買ひ、賣り、植ゑ構造せり、然れともロトがソドムより出てし日、天より火と硫黄と雨りて、悉く彼等を滅せり、人の子の顯はるゝ日にも亦是くの如くならん」(ルカ十七の廿八―三十一)げにやロトの如く「火の池」(默示錄二十の十四)より救はれて「新天新地」(默示錄二十一の一)に位する人は福なる哉。

主の御前に汝の心を水の如く灌げ
街衢のほとりに、饑ゑたふるゝ汝
の幼兒の生命のために、主にむか
ひて兩手をあげよ。

耶利米亞哀歌 三の十九

夕暮の歌

聖にして福なる常生なる天の父の、聖なる光榮の程かなる光
イエス　ハリストよ、我等日の沒に臨み、暮の光を見て
神、父と子と聖神を歌ふ。生命を賜ふ神の子よ、汝は何時も
敬虔の聲もて歌はるべし、世の有らゆるものも亦汝を讃めた
へふ。

賢明なる大監督ジフロニイ翁は、其昔全世界の救主が將に十字架の難に罹り給はんとする前、一日其弟子等と共に西山に傾く靜けき入日を浴びつゝ耶路撒冷をうち見遣りて神城の滅亡を語ひ、悵然として浩嘆を洩し給へる城外の一山に己れ亦獨り立ちつ、思のこもれる目指をば今しも暮れ行くパレスチナの地に放ちぬ。遠く靜けく安

らけき夕暮、次第に薄らぎゆく微けき光、冷かに爽けき夕風など見る限りの風情は神の役者をして深くも感に入らしめぬ。老翁の眼下には今耶路撒冷横はりて大なる記憶は此の都城と共に存せり。夕日は早や彼方に沒して名だゝるソロモンの神殿をも、イロドの宮殿をも、シオン城の堅壁高樓をも照さずなりぬ。宛から家主の身罹りて主なく立てる家の如くうら愁るはしく暗らかりき。賢明なるジフロニイは今しも神殿の廢趾を眺め遣りて、痛くは心を傷めざりし所以のものは、全世界に照りて主の榮光を遍からしむる新耶路撒冷の復興すべきを知ればなり。そは未だ老翁が大監督の位地に就かざりし以前、既に杖を曳きて希臘、パレスチナ、シリヤ、埃及等を遍遊し、到る處に聖賢を訪ひ、基督教の都府を見、到處に救世主の名により て献げられたる聖堂に參拜せしが故なり。

こをもて今しも耶路撒冷の墟趾に沈みゆきし入日は賢明なる老監督の思想をして眼前の事情以上更に高尚なる點に向はしめしなり。曾てイリヤが『細且微なる聲の中に』（列王記略上十九の十二）神の立ち給ふを認めし如く、斯く賢明なる――哲學者、歴史家、能辯士、詩人、牧師、聖人たるソフロニイは、入日の微けき光に照されつゝ或る高尚なる天の靈光を我が心に感じたるなり。西山に傾きし物質的太陽は監督の智慧をして心靈的太陽に想ひ到らしめしなり。然り至聖にして生命の源なる王者の像は今や彼が心の眼前に現はれしなり。將に沈まんとする西山の日は老翁をして墮落せる人性の暮を追想せしめたるなり。夕日の靜けき光は疲れ果てたる暮の自然を照らしつ、老翁の記憶に人と人の天性を照し且恢復せんが爲めに暗黑なる人生に於ける神の子の降臨を鮮に書き出せるなり。

又老翁は夕暮の冷けき空氣を呼吸して聖神が人間界を革新し給ひし恩寵を感したるなり。是に於て老翁の靈魂は深き感謝の情に滿されつ、聲震はして『聖なる光榮のおたやかなる光』の夕暮歌を全世界の造物主に歌ひ奉りたるなり。

吁、吾が救ひ主なる基督よ、天の父を我等に示し給ひし者よ。吁肉眼をもて靜けき入日を見る如く、斯く靈眼をも見るを得る聖き光榮の靜けき光よ、願くは世を救ひ給へ。爾は曾て幽暗なる西――吾人が人性に降臨し給へり。故に西山に傾く夕陽を見る毎に爾の父を歌ひ、爾、子を歌ひ、聖神を歌ひ、三位一体の神を讃美し奉るなり吾人及ひ世の一切の生者に生命あらしめ給ふ神の聖子よ、吾人は聖き聲をもて歌ひ奉らん。朝と云はず夕と云はず絶へず爾の前に伏し拜まん。爾は世界の生命にて在すなり。全世界も亦爾を讃美したて

まつるなり。

爾來此の聖歌は基督教の聖堂に於て唱へられ、而して幾世紀を經て各所に唱せらるゝも其溫藉を失ふことなく、却つて年と共に益々深き趣味を湛へつゝ其神聖なる思想と感情とをもて我が心靈を興新する覺ゆ、吾人は自ら之を歌ふも聽くも常に恩寵の甘味を味ひ得て我が內容をして一層高潮なる感情に滿たさしむるなり。　そも太陽は夕に至りて何處に隱るゝか、そは決して消え失するに非ずして同一の光明をもて地球の他の方面を照すなり。斯くの如く今や吾人か眼前より隱れたまへる心靈上の太陽も他の世界を同一の光をもて照し給ふ。信仰の世界それなり。

星の天

詩篇八の四、五

太陽は今や金色潮せる海原に沈みつゝ行方の半球にそが生命と光とを注かんとて去る。夕暗の幃幕やうやくに垂れかゝりて田も山も林もそが美はしの景を我等が目より秘め去る頃となれば、此世凡百の美觀に超えたる新なる觀物ぞ現はる。さても此時に方りて爾曹は其頭上に洋々として廣ごれる天の蒼穹を仰き見るなるべし、又天の天色をもて此處かしこに輝々煌々として光る發光體を認むるなるべし。斯くて誰か心にか奇異と爽快とをもて滿されざるやある。又何人の目か天體の此盛天なる美觀をば冷然として看過するを得るものぞ。

星の天の美觀は曾て我等の先祖を驚かしめ、そが群星に叩拜を捧

げしめたりき。そはそこにあのが守護の神存在すと思ひてなり。又イズラィリの聖詩人も亦それに於て屢〻造物主の榮光を讃たゝへにき。斯くも數千年前我等の先祖が今と變りなき整然たる形狀にて眺め遣れる發光體は、現に日に〳〵地球の周圍を廻轉りつゝ、老いず壞れず、而もろの撓みなく絶間なき廻轉より見れば、如何に吾等をして其が永久と小壯と活潑とを思はしむることぞ、して全世界の大造物主は、天の美觀が何時しも同じ形狀にて有るを心足らず思ひ給ひて、天の蒼穹の折々に變り行くやう、茲に四季のそれ〳〵に星の特別なる群をば現し給ふ。

吾等は近代に至るまで此等發光體を數ふる術をも知らざりき。されど今や望遠鏡の益々完全になり行けるにつれ、肉眼の未だ曾て見得ざりし數多の發光體を發見するに至れり。一星の光線は一秒時に

三十八萬四千里を走るにも係らず、一千年以上を經ては我が地球に達せざるなり、又或る發光體の如きは其光の終に達せざるもあるなり。如何に宇宙は恐ろしきほど廣大無邊なることぞ。斯かる所に斯かる宏大にして且美はしき發光體を布き給へる造物主の全能は何等無限の大能ぞや。

仰ぎて蒼穹を見渡せば、一個の發光體かと見違ふばかりの二重三重の星列なる、されど眼鏡もて見透せば、そがうちには幾條の焰きらめく火球の團體なるを見出し得べし。此等の火球の他の球を廻轉するには時として千二百年を費すことある也。距離の遠き推して知るべきにぞ。而して此等の星――寧ろ太陽とも言ふべき者の、各其光を發射するは何等かの使命あること疑なしとす。彼等の各々は我か太陽と均しく行星の從者を伴ひつゝ、晝夜の分ちなく輝くなれど

日中の發光體の赫々たるに遮られて、吾等の目には觸れざるなり。

さても又天上に棚引ける白線、所謂銀河なるは、斯くの如き不動の星々より成立ち、そが餘りに吾等に遠きが故に、吾等の肉眼には唯一眼に流れ合ひたる河とのみ見ゆるなる。

さはれ斯く不動の星にて占められたる場所は、いかに廣く且大なりとも、又その數々のいかに算へ盡くせぬなりとも、そは唯全世界の一小部分のみ。吾等の眼にこそ見へね遠く天涯の果には尙無數の星の群なすなり。望遠鏡の領分の極みて於て天文家の所謂「星雲」と稱ふる小き白星の霧を見るべく、而して天文家の實驗に依れば、斯くの如き「星雲」は二千有餘をもて算ふべくして、各無數なる不動の星よりなると謂はる。

全能者か廣大無邊の天に於て、吾等の目前に列ね給へる星宿の抱容ずべからざる低の深淵はそれ斯くの如し。斯かる驚くべき大數は何等支柱あるなく、又いかなる鎖にも繫がれずして、而も停滯なく敗績なく、確固たる調和、秩序、整齊を以て、或るものは彼處に安息ひ、或は廻轉り行くなり。斯くも茫々極みなき蒼天の事、到底吾等が智慧の得て測り知るところにはあらじ。見よ、十八の行星と四千の慧星とを從者となし、堂々として大空を線り行く我が太陽も、此巨大なる宇宙の前に對しては抑も何にか比ぶべき、猶ほ大海の一滴に過ぎざらまし、況んや地と人にありてや「我爾が指の所爲なる諸天を觀、爾の建てし月と星を觀れば、即ち人は何物たる、爾之を顧るや」(四篇八の四五)とイズライリの戴冠者たる豫言者は、天の蒼穹を仰ぎ見て斯くぞ歌ひぬ。げに天文學者の諸大家が、造物主の智慧と全能とに畏み伏しつ、敬虔の心をもて

其名を唱ふるにあらざるよりは、決して强りにせざりしも謂ある哉

輝々煌々たる算へ難き大多數と巨大の距離とによりて人智を絶驚せしむる此天は、人の心に高尚なる慰藉の眞理を宣布するものなれ心地よき空の澄色と靜けき星の光とが爾曹を光明なる蒼穹の下に誘ふそが靜夜に於て、目を擧ぐれば今しもおのが懷に眠らんとする地球に安息の瞬をそゝぐ無數の球頭をや見ん。　嗚呼その瞬こそは數萬の世界を己が内に安息せしめ、父たるの慈情をもて己が造物を看護り、そが無數の造物に生命、呼吸、ありと有らゆるものに不足なからしめ給ふ　仁慈なる照管の表象ならで何にぞや。……吾等の心靈は、折々は此世の辛らき波風より免がれて安息を要すなり。或は重き損失缺乏の後の慰藉ころ切なるなれ。さらば人々、目を擧げてそ見よせ。光明なる彼の天は、爾曹をして憂も悲も無き彼の世を

想はしむる事なからずや。此時や爾曹の心靈は、天の父のもとに寄り縋りて、そが慈愛の懷に抱かるゝ心地もて安めらるべし。哀れ此世吾等の死と墳墓の幽暗と恐怖とは、時としては我が心靈をして神の約し給ひし永生に不安の影を宿らしむることあるべけれど、さはれ若し煌々たる無數の發光體をもて飾りにかざられたる此光明なる天を仰ぎ見ば爾曹の眼前即下に救世主の告げ給へる「我父の家には第宅多し」（十四の二）との頼母しき聖言の、いや懷かしくぞ思ひ入らなむ。爾曹の心靈が斯くも向上もて憧がるゝ此等光明なる世界に、其智慧の眼をも共に傾け、又我が肉の封鎖を化脱するを勉めて、以て己が靈魂は固と地の塵にあらぬを悟りつ、使徒と共に「我等の國は天に在り」（三の二十）と語れ、然り人の本領は地にあらずして天にあるなり。

夜半

我なんぢのたゞしき審判のゆゑに
夜半におきてなんぢに感謝せむ（詩篇百十八の六十二）

戴冠者たる豫言者は抑も如何なれば人の最も愉快とする睡眠時中に於て、獨り其寢床より起ちて夜半の感謝を爲せるや。そは幾多の實驗の示す所によれば、自然界の爲め、人類界の爲め、將神靈界の爲めに、或る重要なる有形的事件の夜半に生じたる例少からざればなり。又全世界の至上なる治者は敬虔なる人々をして悔改めの祈に起振せしむる所の義爵をばしば〳〵夜半に於て成就し、今も尙ほ然らざるはなきなり。

蒼天の下、夜を林又は谷間に明す必要ある人は、深沈として夜の

更け行くにつれて萬有の靜謐に歸する事實を認むなるべし。晩歌歌はる入日の頃を愛でつゝ、好んで語り合ふ禽鳥も、夜陰到れば身を翼に包みて沈默に歸り、野に牧はれたる群は露けき青草をば快氣に終日食みつゝ、夜に入れば互ひに團圓として死者の如く睡り去るべし草木は堅く其葉を捲き其花瓣を鎖し、動物は皆其聲を潛めつゝ、香氣ある多くの植物はそが香をだに立てざる沈默を守り、斯くて自然は一切不動、衰弱、恐怖の狀態に落ち來るなり。是れ何に因りて然るべき乎、蓋自然が一日の間斷なき勞働を終へて、夕ざれば漸く疲勞を覺え來りつゝ、夜の更け行くに隨つて或る疾病の態に陷るが故なり。自然の生命に必要なる日の光は暮と共に漸く我半球を解して遠く他の暗黑なる半球に移り去る。その去るに隨つて自然は一種の狀態に陷るなり、而して太陽の益〻距りて吾人と正反對の中心に立つ

の時は乃ち夜半たり、自然はろが瞬間に於て己が將來の運命を決せんとす。

自然既に然り、吾人の身体は將如何。著名なる醫士象博物學者の曰へるに、『我が地球の正しき回轉によりて吾人に課せらるゝ二十四時間は、特に人の生理的經濟上に認めらるゝものなり。此の正しき時間は亦諸般の疾病上に現はれ來る。そも吾人が生理的歴史の正確なる段落は、固とその基礎に廿四時の期間を置かるゝものなり。而斯かる正しき期間は恰も吾人が自然的年代記の一頁とや謂ふべけむ斯くて吾人は日の暮れて更け行くに從ひ所謂晩の癘と稱へらるゝ病に罹る。然してそが結果は眞の癘と同じく睡眠中に起る蒸發によりて、衰弱、夢、病革を生ずるなり。されば人は夜毎に蒸發するものと言ふべくして、そは身体の質によりて多少の差別こそ存すれ、な

べてそが助けによりて日中身に受けし不利有害なるものを排泄し行くなり。此の日々の病革こそは寧ろ人の健康に缺くべからざるものなり。而してそが病革の時期は癘の最高點に達したるの時、即ち太陽か他半球の中心に懸かる時なり、是れ夜半なり。

此時に當りて吾人の心靈は如何に爲りゆくべき。終霄眠り成らて轉輾するもの、或るは微夜の酒宴に侍べるもの、或るは餘儀なき勞働に一夜を過すもの、或るは孤坐獨想に沈むものは、正しく十時を報ずる頃よりして己が心靈は晩照に萎む花のごと閉ぢ初むる心地しつ、遠寺の鐘の響て十一時を告げ渡れば、不安の念頓に漲れ立ちてそが何たる理由ともわかぬ憂鬱に沈み入るべし。沈々として夜半近く更けゆけば不安と重苦しき心、地のいや襲り來て、そよりの音にも後めたくぞ思入らむ。凡そ屋外の聲にして夜半ほと人の心を聳たし

むるはあらじ。唯曉告ぐる鶏の聲のみぞ待たるゝなれ。心靈はそが聲と共に一時に重荷を卸したらん如く自由と勝利と平和とを感し出づべし。されど凱歌未だ揚らず、曙の光猶ほ到らさる間は、人は不安の獄に惱む。

それのみか、若し心靈上の生活に實驗を積み、深く人生を達觀したる人々の、吾人に告ぐる所に聽かば、夜半の恐怖はひとしほ強きを覺ゆ。そはろれ等の人の實驗に依れば、物質界の活動の停滯若くは衰弱するの時は、神靈界の活動劇甚なるを致すの時なり。吾人は今此等苦行者の著書を引きもて、惡魔と善天使の夜半又はろが前後に當りて、人間に對して施さるゝ有形的作爲の事實を示し得べし。

古代の或る苦行者の曰ひけらく『我が兒よ、深更若し祈禱の念起らば、起きて祈れ、そを忘るゝなかれ。そは其時汝の守護の天使が汝

を呼び起して共に祈るを望めるなり』と。更に近く聖彼得堡に住める一苦行者に就きて語らむ。七十歳の翁あり、十年一日の如く夜半に起き出てゝ聖像に燈明を點じ、跪きて手を擧げつゝ身動もせて熱切に祈禱するを常とせり。人ありて其が故を問へば答へて曰ひけらく『夜半は人の熟睡する時なり、そが寢床は我が弱り果てたる肉体の棺の如し、而して心靈は此際何等の守衛もあらざるかゆゑに、恰も此世の賊の忍び入りて窃盗を擅にするが如く、心靈界の賊の横行するも亦此時なれ。されば我は神が此の眠りたる世界と、睡りたる人々の棺と、ろが心靈をば護りて惡魔の誘惑を禦ぐ天使を降し給はむやう夜半に祈るなれ』と。げにや人の眠れる間に麥の間に惡魔の蒔くてふ稗に就ての救世主の比譬（マトフェイ十三の二十九―三十九）の思ひ合はされて苦行者の心掛けのあだならぬを深くぞ覺ゆる。

宜なる哉聖王預言者太闢が、夜半寢床を起ちて祈れるの偶然ならざるを。想ふに預言者の靈眼には、天使と惡魔の兩界が人類界の爲に相戰ふ慘澹たる修羅場の映じたるならむ。しかして此の激戰の日沒より始まりて夜半に至りて益々酣なるをも認めたるべけむ。さなり、如何なる秘密の此の睡眠時中に行はれ、如何なる驚くべき現象の吾人が周圍に落ち來るか、總て此等に就て何の思慮分別をだにせずして、大膽にも漫然として睡眠に入る者の如何に危かるべきかは預言者の深くも心を痛めつる所なれ。且預言者は能くそが國民の歷史を知る、神の攝理は殊に夜半若くはそが前後に行はれしことをも知れり。神は夜半の前後に於て古代の列祖、預言者に顯現し給へり（創世記十五の一より五、五十六の二サムイル上三の三より十六、同下七の四より十七、歷代史略上十七の三より十五、ダニイル二の二より七、十二、十三其他）いづれとも重大なる事件は夜間又神の選民の生活上に起れりき。假令ば神は夜半埃及に行き

（埃及記十二の九、三十）夜半埃及の初生兒を滅し、夜半イウレイの民を埃及より數ひ出し（埃及記十二の十九、三十一）夜半神は紅海を乾し（同上十四の二十四）夜間「マンナ」はアラビヤの野に降り、露はゲデオンの毛捲を霑しぬ。天使は夜半アッシリヤの軍隊に降りてイエルサリムを圍める八萬五千人の兵を殺せり（列王記下十八の十七、十九の三十五）夫れ斯くの如く夜半に行はれたる神の審判を憶はゞ、預言者たるもの如何で祈禱せずして止むべけむ。豈に獨りイズライリ民の上と言はむや。全人類社會に關はる至深至妙なる秘密は靜なる夜半に啓示されにき。古代の聖歌に曰へるやう「萬事それ靜けき沈默に存す、夜間天の寶坐より滅亡の地の中心に殘忍なる甲兵降る」（ソロモン智慧書十八の十四十五）と。

ろも神が、其救の業を起し給ふに、如何なる時機を撰むは宜しかるべき。聽て大滅亡の到來すべき此の地が、其衰弱の極度に達した

る時（夜半）に於て始め給ふは最も賢きことにあらずや。神の子が人類の間に降り給ふには、人が最も便りなく感じて救助を希ふ心の湧く時（夜半）ぞ宜からずや。なべて人類の衰弱せし生活上に、別けても生理上、精神上の病革の行はるい時（夜半）こそ、その機會にあらずや。又我が内心の法老（埃及王）――惡魔が宛から吼ゆる獅子の如く護物を求めて徘徊するの時（夜半）は是れ人の熟睡に入りて最も危險なる時にあらずや。されば こそウィアレームの牧者も夜間の警衛に於て主の降臨を報する天使の歌を聞きたるなれ。イウレイ人にありては夜守りは夜半と定まりたりき。更に思へ、星の、博士に現はれしも夜半にあらずや。しかして夜半は常にも星の殊に冴ね輝く時にあらずや。然り天地の主宰の降臨は夜半に成就せるを記すべき也。聖靈の至聖童女（マリヤ）に降り臨みしもそが夜半の祈禱の

折りにころ。更に吾人は夜半に起りたる重き事件をば救世主の生涯に見出すべけむ。我等の主耶蘇基督は夜間しば〳〵人なき處に退きて人類の爲に祈禱をなし、夜半海を渉りて將に溺れんとせるペトルに手を與へ、夜半の頃我世最后の祈禱をゲフシマニヤの園に獻けて血の汗を流し給ひ、夜半の頃イウダの賣るに任かし、夜半墓より復活り給へり。茲に吾人の心すべきことぞある。古傳に依れば使徒ペトルは夜毎夜半に起き出て、曾て三次主を忌諱し罪を悔いて泣けりとや。使徒保羅は屢〻夜半に至るまで初代基督教徒に道を說き、夜半又シラと共に祈禱に起てることありき（使徒行傳十六の廿五）

それ斯くも吾人をして燃ゆるが如き熱心をもて祈禱に心を奪はしむる夜間又は夜半の事件に關はる記憶はいと深なるを知るに足らむさはあれ更に恐るべき一夜半あらんとす。そは想起ずだに身毛よ立

つばかりにして而もそが記憶は吾人に重要缺くべからざる所の全世界に向て行はるゝ一大夜半の大革命――即ち主の再臨是なり、最終審判なり。そは今日とても人の世の或る部分には行はる。曾て夜半に神の審判埃及に行れ、神の民は埃及より遁れ、降りて又夜半にそが最終の亡命起りにき。フラウォの記する所に依れば、イエルサリム神殿の門おのづから開け、『此處より出てよ』との聲天より聞へたりと傳ふ。嗚呼夜半々々！夜半に大審判來るべし。救世主は己が再臨を豫言して語り給へる毎に切なる心をもて吾人に儆醒と祈禱とを促し給へり、ろは夜半吾人が熟睡に落ちて事の起れるを氣付かであらんを危み給ひてなり。それ盜人の夜潜み入るが如く審判は亦突如として來らむ、主は亦己が再臨を譬ふるに十人の童女をもてして曰ひ給はく『中夜呼ぶ聲ありて曰く、視よ、新娶者來る、出てゝ彼を迎へよ』（マトフェイ二十六の五）と。

ろも吾人が身体は如何なる處に死して如何に葬らるべき。或るは塵土に掩はるゝもあらん、或るは海に葬らるゝもあらむ、或るは火に焚かるゝもあらん、或るは夜間の盜賊の爲に我が心靈より奪ひ去らるゝこともあらん。その何處如何になりゆくとも此世末期の夜半に我が心靈の包、皮は天使の吹く喇叭の音に呼び醒まされむ。設令其肉は地の塵に混り去り、其血は地の肥料と化し、其筋骨は土に歸して復昔日の質にあらずとするも、そも爾の罪に至りては斷じて蝕腐し去るものにはあらず。凡そ墓に在る者は皆神の子の聲を聞く。爾も亦聞かざるを得さるべし。此時に當りて恐らく爾は熟眠みかねし者、顏を洗はざる者、身飾せさる者、何等の用意もあらぬ者、悄然たる者として、爾の神及び全世界の前に出て、重苦き記憶を荷ひつ

審判に引かれむ。『吁、審判者が恐るべき寶座に坐し給ふの時は是れ如何なる時、又如何なる日ぞ。記錄は開かれ行事は規責され、暗處の秘密は許かる……天使は傍に立てり、晝夜犯せる我が行爲、思念、意思は隈なく糺問せらるゝ所となる。吁、此の時や是れ如何なる日ぞ』（三歌經書）

而も爾は此の時に就て寸毫も思を寄せざるものゝ如し。哀れ爾が可憐の心と手とが爾の爲に夜半の記憶を蒐集せんとする此の夜に於て晩餐をもて其身を重苦からしめ、又己が臥床に入りて一日の感謝を献くるをもせず、守護の天使に向ひて『我が生命を守り給へ』と祈ることをも皆打忘れつ、漫然として睡眠に耽けらんとす、或るは夜半の暗黑の其れよりも暗黑なる事を企て或るは行はんとす。或るは又夜半爾は『今日飲食せん、明朝死せんも計るべからず――何一つ遺るものなければ』てふ肉慾家の妄念をもて己が心を滿足せしめんとすなるべし。迷へるも亦甚しからずや。心せよ、誠に明日死せむも知るべからず、否明日と言はず晨にも然かあらんか計るべからず。已に死しては汚れたる爾が生涯の諸の日、諸の半日、諸の夜、諸の夜半は、此世末期の夜半に突出されて、爾が一生の行事と歴史とはいたくも暴露さるべきぞ。しかる時に及んて爾何をか言はんとする『あゝ我が生れし日は詛はれよ、我が母のわれを生みし日は祝せられざれ、わが父に男子汝に生れしと告けて父を大に喜ばせし人は詛はれよ、其人はエホヲの憐まずして滅ぼしたまひし邑のごとくなれよ、彼をして朝に號呼を聞かしめ、午間に鬨聲をきかしめよ。彼我を胎のうちに殺さず、我が母を我の墓となさず。常にその胎を大ならしめざりしが故なり、我いかなれば胎をいでゝ艱難と憂患を

かうむり恥辱をもて日を送るや（イエリミヤ廿の十四、十七）是れ爾の言はむと欲する所なるか、咄無益の雑言、疾く咀ひ去れ。しかして能くすべくは爾が徒爾なる所業一切を咀ひて眞面目なる生活に移り、夜半起き出て、神の賜はりたる己が生存をいや豐に祝福し給はんやう祈禱せよ。夜半の早起は若し爾に堪へざるあらばうは眠るも可なり、唯罪を犯す勿れ。請ふ心にとめよ『一たび死ることゝ死して審判を受くることゝは人に定まれる事なるを』（ヘブライ九の二十七）

附録

高嶺の月

七月二十六日富士六合目の石室に宿る。

今宵少しく頭痛して眠り成らず、四更の頃、寒を忍びて戸の外に出づれば片破月の手に取るばかり近く、中天に清めるを見たり。寒光凝りて玲瓏珠の如く、銀波溶々灰沙を籠めて巉岩黒人に似たり。碧露滴りて其下に富士の巨人洗禮を領す。洗を領けたる巨人は頭部に數條の白髪を流して永久の天高く呼吸を續けたり。其姿老牧者の月下に夢みるが如く、將た義人の臨終に似たり。

今宵こそ、げにヘルビム、セラヒムが默想の時なれや。

見上ぐれば天は薄き藍色を湛へて、囁く星の光も疎らに讀まれたり、如何に崇高の夜なるよ、如何に神秘の夜なるよ。

脚下には低く低く、日中よりも低く垂れたる白雲、圏々下界の上に群がりて月光の下に綿の如く和らかに、ほの見えぬ。

嗚呼余も亦月明の夜、さびしき孤島の上に立ち、蒼茫たる大洋の窮りなきを望みて、獨り人生の悠久なるを想ふ瞬時の聖者に非ざるか

四邊は沈として靜寂無量、天地は獨り清明安和の氣に滿ちぬ。あはれ久しき人の都に塵埃を啜りし人の子も、今宵始めて遠く人寰を離れて天の近きを覺えしよ。

なげき、うれへ、もだへ、かなしみ全く心に默して、我は無限に觸れ我は永劫を見ぬ。嗚呼美しきかな、高嶺夜半の月。斯くて暫らく月下の巨人に對して默想を凝らすうち、端なくも數千年の昔ヤコフが

「天懸梯子」の夢を想ふて、今夜祈禱の念我心を領しぬ。

見よ彼處に銀燭、此處に祭壇、天地は將に我が爲に壯嚴なる聖堂と化したるを。（曙夢）

海と人生

天地紫に暮るゝ夕、我は孤影飄然として東海の濱に下り立ちぬ。前には蒼茫たる大平洋を抱き、後ろには幽かに松風の音律を聞きつ、望は長く、思は深く、定かならぬ一種の哀情はむら〳〵と心に湧きて、あはれ我胸の狹きを嘲ちけり。

我は何時しか手にせし小石をば、不圖海中に投じぬ。小石の跡を中心として、周圍に圓く畫かれたる幾重の波の環は次第に太くなり勝り、見る〳〵岸より岸に一種の囁を殘しつ、尙ほ遠く〳〵大洋の

沖に廣がり、遂には端なく延び行きぬ。想ふに彼は東海の岸より西海の津々浦々まで、海の始まる所より海の終る所まで、傳はらでは消ぜざる可し。斯くて彼れ綠蔭の里に響きては我胸の鼓動を「彼人」に傳へ、白雲の鄕に響きては我現在の望を宇宙一個の靈に吐露せん。畢竟するに創造以來絕ず響き渡れる彼千波万波、縱令そは怒濤の大なるも、漣波の小なるも皆是過去現在に於ける人心の反響に非ざるなけんや。

ア、我が投ぜし小石、そは甚だ小なりき、而も彼は確に大海の面を動かせしよ！

茲に於てか我は想へらく、我等日常知らずして過ごす我等の些細なる一言一行は、尙ほ人生史の大海に於ける小石の類に非ざるかを若果して然らんには我等の言は縱令小なりとも、善惡共に歷史の單

位となりて永く人類より人類に、世より世々に傳はるべきものにして、之が爲に後世を禍するか、幸するかは只各個人の用意如何に於て存す。

「時」は絕へず我生活の「モメント」を深く歷史の面に印しつ、斯くて我言行の數々は天の祭壇に展べられて永へにイエゴワの面前に在り

此點に於て人は永久なる者にして、人生の尊貴深遠なる意義全く茲に存す。而も亦同時に其義務の崇高なる、責任の重大なる所以のものも亦茲に存するなり。何となれば河の支流の淸濁は尙ほ本流に影響するが如く、我等の一言一行は以て人生史を汚すべく、以て人生史を淸む可ければなり。

されば歷史は單に過去の意味に於てのみ解す可きものに非ずして我等には未だ來らざる永遠の歷史ありて存す。而して此永久史を天

父の前に高く、清くするは將に人生の最大最高義務に非ずや。

嗚呼小石と大海、而して人の言行と永遠の歴史、我は此間に未だ我筆にて言現はし得ざる大なる連絡と或る意味の存するを見るなり

（曙夢）

濁涙

今は早や幾歳昔の事となつた。此頃の天氣模樣を見ると、そゝろに其時が想ひ出される。風はたゝ柳に二百十日哉。先づ此厄日も無難に濟んだが、まだ一とつ！　二百廿日といふ後詰の難日を控ねてをるので、何れの農夫が額にも、何んとなく落着のわるい皺を寄せてをる。渡場の掘立茶屋に、買物がへりの村の者が、毎時も悠乎とした里の夕暮を賑はすのが、それも此頃は頓と聞ねない。用無の太郎作老爺ばかりだ、又いつもの、何んだ太郎八豆腐は豆だ……なんて、鼻歌か何んかで、醉どれて歸つて來たのは。どこの村々も一體に沈みかちてある。思へばそれも無理もないことで、一年の辛苦が泡になるか、實になるかの界、浮乎とはしておられぬ筈である。却説も丁度其二百廿日の日であつた。厄日と氣の付かんでもなかつたが、例に依つて鮎釣にと出かけた。朝からの天氣工合が面白くないのであつたが、そこは所謂今日ころは今日ころはの釣道樂の持前で矢ッ張出掛けたのである。

渡場邊へ行くと、一體に空が淡乎曇つて來て、折々人を馬鹿にしたやうに、雲間からぱかッと日が照つては又引ッ込む。どうせ釣れる日ではないと知つてゐながら、矢ッ張竿を下して見んければ氣が濟まぬ。

「どうだ、酷く釣れないぢやないか、又出水かな……」

と、いへば、

「さうさ、日が日だ、出るね……」

と、同行が言ふ。出水の前には必然鮎が釣れないものである。まあ〳〵緩乎遣らうよと、いふことて、川原へ竿を置いて、しばらく休息て居ると、段々雲行が忙しくなつて來て、北へ〳〵と押上げる。那須、高原なんどの山々は、無論見えなくなつた。其癖風は南へと吹てをつたが、

「この引ッ返しが雨だぞ……」

と、言出したものがあつた。

暫らく過と、風がぴたッと止んだ。雲は相變らず千切れ〳〵になつて走る。眞黑いのはづッと上に、灰色した薄いのは直ぐ頭の上と

思ふ處を、はやいわ〳〵、すッすと飛んて行く。

「來るぞ〳〵……」

と、いひながら、氣早の一人が掻浚ふやうに釣道具を片付けて、切々と駈出して渡場の茶屋へ飛込んだ。

果然！

川下の八幡の森から掛けて、一體に早や灰色をして、彼此するうちに、さッと降り出して來た。さうして一寸止んては又降り出す。その度毎に風は增す、雨は強くなると云ふ工合て、彌々以て容易ならぬ模樣と相成つた。

とう〳〵吾々も掘立茶屋に籠城させられて、出るも退くも出來なくなつた。風は一吹々々に凄まじく暴れ出して、雨はまけるやうにどんどん降てゐ。向岸の渡小屋の上に、此川筋の久しい浮沈を記憶

に疊んで、今は長老株と見られてをる樫の大木が、恐ろしい鳴響を其枝に撓せて居る。茶屋の裏手の竹藪が薙立てられるやうに、撓んでは起ると、直ぐ又伏せられて、ばちり〳〵と其折れる音が、緩急はあるが川音風音で、一樣に唯瞪々と鳴渡る中を、横裂につんざくやうに聞える。出水には馴れた茶屋の亭主ですら、何んだか穏かならん皺を寄せて、折々戸の隙から覗いて見ては爐端に坐る。吾々も其處へらから覗いて見ると、ひどい〳〵、末世審判の日かと思はれるほどに、天地晦冥として、風と雨と水とが揉にもんでをる。正午頃には早や五尺の濁流を漲らした。夜にかけては一丈は缺けまいと言ふことである。

四手網を曳かう……と言出したものがあつて、自分も其仲間に入れて貰つた。

夕方から漸く風も雨も止んだが、水は是からが出盛になるのである。四手の足場を懸けた處は、三尺後去り五尺引込みして、日中の場所は今は最う川の眞中ほどになつて仕舞つた。掘立茶屋は暮少し過ぎから已に危くなつてをる。夜は次第に更る。鮎、鰻、雜魚、一曳毎にざく〳〵と這入る。面白いは其れてあるが、目を擧げると、其度に足元を掬はれるやうな氣がして、慄とするのは凄ましい此夜と川の光景である。

平素には曲りに曲つてをる此川筋も、かうなつては田も畑もひた一面平押してある。一里ばかり川上から漫々として漲つて來る濁流が、向岸の樫の下に、天然の堤防を爲してをる巖崖を目がけて二三町先から大波小波をうねらしつ勢ひこんで揉んで來るうちに、先手は早や壞れよ缺けよとばかり瞪と崖に打掛る。ぶつかつては這上る

やうに逆巻く。逆巻く浪頭が齒をムキ出したやうに、さッと白く散れる。散れゝば又た新手が逆巻く。降つた丈の雨と飛る丈の水とが、此崖を打壞らん爲めかと思はれるほどに、爰に激して恐ろしい地鳴をさせて居る。流石に崖は小搖動もせぬ。それ丈け又强く水は反廻されて、一廻り恐ろいし渦を巻きに巻いて、一方に活路をひらいてソコを一途に無二無三に走り出す。水勢茲に一轉して、今度は此方の桑畑を衝いて來るのである。どさ、り〳〵と意地惡く大地を掻きむしりながら、又澎湃として漲り行く。その行方の空は地平線との間を白くすかして、明日の晴を豫象したが、此處らあたりは未だ暗濛として、折々雲の切間から白らけかへつた月の光が、ぺロリと背るやうに濁流の上を掠める。何んだか蒼白い顏したものが、ふら〳〵と波の上を渡つて來さうな心持がする。此凄い恐ろしい中を浮きつ沈みつ、どん〳〵押流されて行く種々な物が見える。風呂桶らしいものが流されて往つたのは先刻てあつた。今亦大きな眞黑い物が遣つて來た。

「家だ……」

と言ふものがあ、、

「唸るやうだ、牛か馬だ……」

と叫ぶ者もあつたが、折柄一團の雲が月にさしかゝつて、惡魔の羽のやうな黑い影を下界に敷いたので、人々は其れなり沈默に復つた。ちやぴ〳〵と岸を打つ波が、幽暗の切齒のやうに耳に付いて、何んだか急に忌な氣がし出した。盜むやうに川面を見ると、網先二三十間の處に先刻の黑い物が渦に巻かれてをるやうてある。ぱつと月がさした途端、見れば今それが渦を外づれて、其端の奔流に陷ち

た！絶叫は礫の如く岸に起つて空しく其影を逐ふた。

「ヤッ、人だ！

「屋根に婦人が！

「小兒……

「小兒を抱いてる！

鮎樓む那珂川の清き流は、濁りににごつて尙數日續いた。ア、罪と惡よ。罪惡の濁流は日に日に如何に多くの人の子を掠め去ることぞやc(素表)

颶風

その一

吾は甲板に立つて居つた。

海は暴れにあれて、荒しい颶風は絶えず吹きすさび、怒濤は白雪と映る亂髪を頭にちらして、狂憤せしやう、恐つべき咆哮をあげて岸邊にうちつけるよと視れば、一時に轟轟と響をたてつ、泡雪の泡沫は沫然と四方にうちひろがる。

穹窿は全然黝色の密雲に覆はれては居るが、暗黑を劈く稲妻は一閃、またも一閃。殷々と鳴り響く雷霆の轟音は天地覆沒のそれか。

颶風は四邊より猛獸の狂ふが如く襲ふてきて、帆柱を折挫き、船具は何處の空ともなく洗ひつくされてしまつた。

船は恰も手球の如く波濤の鋒鋩に掛けらるゝかと思へば、遽かに波間につくられし深潭に向つて逆落しに擠される。如何かして波濤は船体を呑み盡さんとはすれど、我船は尙ほも剛健に澎湃たる巨濤と奮戰をつゞけてゐるのである。

船中には吾の外誰一人の船客も居なかつたが、己れ自身も誰あつて我船の航路をつゞけてゐるのか夢中であつた。が、船は彌々進行を速めてゐる。忽ち吾はこの船が己れ自身の身體のやうに感じた。逆捲く濤は益々巨牙をはる。吁！怒濤！死は此の一戰のうちに潜れてゐるのである。儘よ！死ぬ迄！絶望の思に驅られて、思はず口迸ると、遽かに嚙みつく如く勇氣勃々と增し來たつて、心は强く激動し初める。須臾……、水平線上に一點、碧空があらはれたので、思はず眼を瞠り怡び、飛ぶが如くに全力を傾注しつゝ「ろら勇め、勇め！

希望の光は我手のうち、今一秒、吾は救濟の手のうちなるよ！いざよ貴き戰士の名譽を擔はんと」絶叫した。

この一瞬時、船は淺瀨にのりあげて、凄愴の響は空たかく、船体は恐ろしく激動した。吐嗟！吾身は海中に投げ落ると共に、我呼吸は絶えてしまつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

目醒むれば吾は最と高き岸邊にうち臥してゐる。霽れ渡つた天空は煌々と、空氣は微暖かく、悠々と絲遊萌ゆる春の野邊のそれか。四邊は寂寥々としてゐるが、何處ともなく微かな讃美の調は靜けく吁その音！その調！俗塵に泌みし人の子の耳には迚も聞く事は出來ない、唯だ奇妙しき自然の調和に充滿されし心のみは、その調をきゝ分くる事が出來る。蓊鬱と茂つた嫩葉の薫りと、貴き花の香は水

の流れのやうに胸に泌み込む。

吾は起きあがつた。

何處ともなく我船を呑みつくして終つた海波は、今は靜謐に嘯燿と絶ねざる光線を放ち、太陽はその鋭の如くに澄み渡つた表面に煌々と反射してゐる。漣波は眠れるやうに粼々と岸邊の小石に囁き、あるは剛士の如く肩を聳かして屹立せる巖の裾を舐づつてゐる。

吾は立ちあがつて、靜かなる言ふべからざる嘉音を齎す漣の囁聲に心をむけたが、何處？　遽に靜かに愛らしき琴の音が聞え初めた。我心は夢のやうにろの調の跡を辿つたが、何處とも知らず、恍惚の境に我心は奪ひ去られてしまつた。

『誰れなるや此の妙手、この奇妙しの音を奏づる樂人は。哀れ誰なるや』？

又もや草葉に囁きて、怨を想ふる蟲の音のそれか、愛の幸と憂悶の調は高く低くおこつた。

その音、その調、こは地上の調ではない、否、地上の人にはかくも妙に奏づる事は出來ないと思つた。然し、その調の音は益々強く我身に近寄るを覺ねたが、あな不思議？　そのうちには總て我身の經歷は明晰に描出されてある。激波搖ぎ立つ海の面、玉を敷く碧空、愛、生活、爭鬪、苦惱、あらゆる過去はそのうちに抱括されてある然しその琴の音は耳に聞くべくして心に悟るべからざる絶えざる響てある。我は再び眼を瞻はつた。又も不思議の現象よ！　我眼の前には類なき花の香に充され、欝叢と日影も洩さず熱地の草木が生ひ茂つた園がある。その園、その園の黄金の砂に埋もれし並木路を、日の光を浴びつ、天女の面影を寫せし一人の女が此方海邊の方に向て

歩いてくる。その清々とはれ渡つた鳩の眼は空を瞰あげ、菩の如き口元には幸福ある微笑を漂へ、その柔弱なる容姿は風に流るゝ柳の如く、白銀のやうに晃れる衣服より垂れたる薔薇の花もて編める條は、その足元に輕く搖いてゐる。ろしてその兩肩には黄金もて鏤めし如き濃き金髪が房々と浪打つてゐる。ろの片手には琴を携へ、右手は輕く柔軟にその絲に觸れつゝ絶えざる音を放つ。燦爛なる衣服の光輝は四邊を拂うて、草も木も、その歩調につれ、頭を俯して愍懣に對遇を送る。

神秘の光に掩れし我心は戰慄しつゝ、膝は知ずして低れ、我眼は涙に充ち滿ちた。

天女は靜々と、緩かに園より出てゝ、海邊近く、我方に近づいて來たか、我方を瞻めると、遽かに立停まつた。そしてその妙なる琴

の音も確と已み、歌の調もうち絶へて、煌々とした衣服の光も消え去つてしまつた、その口元の微笑迄も。そして驚愕と恐怖との色はその眼の緑を彩つた。

暫時して天女はいとも嚴肅に、

「何が故にこゝに來られし。何をぞ妾より求め給ふとて。あゝ！汝は朽つべき人の子なるに」

「哀れ、許し給へ。我は何事をも知ゝ申さず。久しき暴風との爭鬪を續けし我船も遂にうち碎かれ、我も海の藻屑とうち沈みしが、目寐れば我身はこの岸に殘りをれるにぞ」

頭を垂れつゝ我は答へたが、天女は尚も嘆息の聲を放ち、

「おゝ若者、汝は最後の一秒に於て、失望の化身とはならざりしか失望、失望！　こは汝の仇なるよ」

『否、否よ』我は絶叫をあげて『罪なき者をば呪ひ給ふ勿れ我は最後の時迄も勇み奮ひて、この暴風より遁れん事を勉めしに』

『さなりき、淺瀬！こは汝が爲の仇敵となりしなり。されど妾の罪も、又』

『天女の罪とは？

『さなりよ、妾はその一分に休息をとりて、佑助を忘失たりしがため』

『さらば天女は何神にやおはします』

『總ゆる世界の群は妾を呼びて、希望(Надежда.)とぞ呼ばゝ』

解くべからざる叢雲に胸蓋はれし我は、愕然として天女の足下に仆れ伏して叫んだ。

『希望！　實によ、世界はそをもて生存へ、憂苦る人はそに對する

愛慕の心もて、生命を續く。されど死すべき者に、希望の面影を如何にしてぞ窺ひ得べきや』

『御空よりの尊重き光を信ずる者には希望の光あらん。汝は最後に至る迄も心をもて御空を仰ぎ、その救儕を信ぜしに依りて、今も尚その生命を見るを得たりしにぞ。いざよ來れ、共に來りて今迄戰、闘きたりし、否よ、尚ほも戰はざるを得ざる海をながめよ』

『哀れ！なほも、經きたりし如き驟風と、戰はざるべからざる乎？』

天女は又も緩に、海邊の方に向て近づいたので、我も立ちあがつて後に從つた。

その二

海邊に近づくと、天女は立ち停まつて、空高く手を擧げたがその一擧手！その一瞬時、今迄も我眼も前に漂渺と限りなかりし海は消

て、その影さり、曠く漠く、砂利もて埋められた大道が現はれた。

そ、そ、その中に趁ひつ、竄れつ、狂奔せる人々の群よ！

如何なる壓迫と兇器はそのうちに蟠まれるのであらう。此處に雜踏を極むる人々は、今よと許り血戰の眞最中。反目、嫉視、殺戮。吁！何たる慘憺の面影ぞ！狂ひ喚んで先手を爭ふ人々。吁！何たる猛獰の微笑ぞ、嘲罵、……蹶起、心地よげに蹋倒せし人々の悲痛の顏をながむる人々に浮びし微笑は。悲劇、慘劇、憐痛の面持したる魔鬼の屹立せるをも知らず、あゝ、その魔鬼の口元に徘徊ふをも知らず、利欲の道に奔れる人々！歩、一歩、分、一秒たりとも遲延したる人らは、傍の深潭に投ぜられて終ふのである。

須臾！一人の英雄らしき男、この塵埃の波を掻き別けて、大磐石の上に跳ひ上り、滔々、輕妙の辯を奮つて喋り出したが、一人の顏を反向くる者すらもない。續てその懷中より紙片を取出し撒きちらしたが、これ等競ひ爭ふ人々は、喚き叫んで握つた許り、先へ先へと道を急いでゐる。氣支はしげに立ち停まりし一人の女、そも又、自が生命を危む如くに行き過ぎてしまふ。

二人、三人、十人、無數の豪傑等が跳出したが、それ等の苦心も水の泡沫。

道路の兩側には、疲勞し、煩悶せし人々の群が、着視めし面を振れて、力もなげに歩を運んでゐる。己が運命を自覺して惘然と座れる人々。倒れても尙も名譽の心に驅れたる人々は兩手を擧げて感情をもとめてゐる。

嘲罵、叫喚、猜疑の聲は雜然たる響を立てゝ、天地も震撼せん許り。凄慘の眺望に目戍れたる我躰は、傷く戰慄して、その巖石！今

も尙ほ自分が立悚める巖は裂碎けて、吐嗟！その渦中に墜落せんとしたとき、急に天女は我身を抑へた。我は聲を放ち、

『如何なる意味ぞ籠めるにや　哀れ全能なる希望の女神よ』

天女はなほも片手を擡げし儘、嚴然と峙立つてゐる。その口元には再び幸福ある微笑を漂べて、

『見よ、速く見よ、』

恁く言ひてふたゝびその琴を撫て初むや、艶妙なる響は又も高く空に響いて、靈妙不可思議の光耀はその服より輝り出て四邊眩しく煌き渡つた。この一瞬時、我身には湧き出づる許りの勇邁と豪毅とのみつるを覺へ、狂奔の流に我心を驅つて身は覺えず、ろの渦中に誘き入れらるゝ許りに感じた。「奈邊へ？」思に歸りてかく己に質問しつ、向側を瞻望すると、その彼岸には朦朧と、艶麗の薄絹をもて飾れる紅燈が、煌爛に光を放つてゐる。その光輝、その反映、我身は心醉して、靈は遠く肉を離れて恍惚の境に彷徨ひ、四邊の陰慘、鬱悶は、何處ともなく消え去つてしまつた。

我身は又も、天地解ち難き不撓の念にみち、いざと許り群羊を驅散して、我こそ先登者の名譽を擅ひ、その紅燈の下に達せんと期したが、眼を瀘げば又も數人の巨人は猛り狂ひつ、そが下に馳せつくるや、哀れ！幻影か？その紅燈は眇か遠く去り、あらはれたるは藍をへし千仞の底も知らぬ深潭である。

失望、恐怖、あらゆる苦惱を面にあらはして、巨人は尙もその紅燈を捉へんとすれば、今はその燈は輕蔑の念を含みし如く凄冷の光をあらはして、物凄く、その面を輝すのみである。狂憤、絶望、深淵は彼等を呑み去つて終ふ。尙もそれに續く偉人の群は、ひとしく

運命の深淵に歸してしまふ。

『解せしにや、今は』

悲痛の色をあらはせし希望の女神は、靜やかに問ふた。

『解しぬ、これよ生活の懊惱。あゝ何等凄冷の光景ぞよ』

『凄冷の光景とよ、こは人の子の受くべき運命。朽腐べき人類はかの紅燈を名づけて幸福とぞ呼び、狂奔してろか下に走れり。されどそは彼等の騙者なり。否よ、現世の幸福なるものは實在すべき者にあらざるよ。深淵！極は總ての者の墳墓。こは如何なる人をも遁さじ、凡ゆる人類はすべてその懷中に。去れよ、汝も又人の子、この渦中の人よ、されど苦悶なく我道を踏み、恐懼なく深淵の澣を彷徨ふを思はゞ、詐騙の光に惑はされず、幸福とは幻影とぞ悟へ、さらば墳墓は永劫に汝が上にあらざらん。いざよ、いざよ』

低くて希望の女神の面影は、遙けく、靜けく、去つてしまつた。

奇異なる醉夢……我は我が睡眠より寤むるを覺へたが、我胸には又も颶風……然も生活の颶風……は強じく起つた。（雨谷）

詩篇

第百三

我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、爾は光榮と威嚴とを被れり。爾は光を袍の如くに衣、天を幔の如くに張る、水の上に爾の宮を建て、雲を爾の車と爲し、風の翼にて行く爾は風を以て爾の使者と爲し、焰を以て爾の役者と爲す、爾は地を固き基に建てたり、此れ世世に動かざらん。爾は淵を以て衣服の如くに之を覆へり、山の嶺に水立つ。爾の恐嚇に依りて此れは奔り、爾の雷の聲に由りて速に去る、山に昇り、澗に降り、爾の此れが爲に定めし處に至る。爾界を立てゝ之を踰えざらしむ、反りて地を覆

はざらん。爾は泉を澗に遣せり、山の間に水は流れ、野の諸の獸に飲ましむ、野の驢は其渴を止む。空の鳥は其傍に棲み、枝の間より聲を出す。爾は上なる宮より山を潤し、地は爾の造工の果にて饜き足れり。爾は草を獸の爲に生ぜしめ、野菜を人の需の爲に生ぜしめて、地より食物を出さしむ。酒は人の心を樂ませ、膏は其面を澤し飯は人の心を養ふ。主の樹、其植ゑたるリヤンの柏香木は饜き足れり、鳥は其上に巢を造る、松は鶴の棲處たり、高き山は鹿の爲、磐石は兎の爲に避所たり。主は月を造りて時を定め、日は其入る處を知る。爾暗を布けば、則夜あり、其時林の獸皆出て廻る、獅は獲物の爲に吼えて、其食を神に乞ふ。日出づれば、彼等集りて己の穴に伏す。人は其工作の爲に出て、勞きて暮に至る。主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、地は爾の造物にて滿ちたり。夫の

大にして廣き海、彼處には無數の動物、大小の生物あり、彼處には舟通ひ、彼處には彼の大魚あり、爾造りて其中に游ばしむ。彼等は皆爾の時に隨ひて食を予ふるを待つ。之に予ふれば受け、爾の手を開けば賜に饜かさる、爾の顏を隱せば惱れ惑ひ、其氣を取り上げれば死して塵に歸る、爾の氣を施せば造られ、爾は又地の面を新にす

願はくば光榮は世世に主に在らん、願はくば主は己の造工の爲に樂まん。彼地を觀れば、地震ひ、山に觸るれば、煙出つ。我生ける中主に歌ひ、世を終るまで我神に歌はん。願はくば我歌は彼に悅ばれん。我主の爲に樂まん。願はくば罪人等は地より消え、不法の者は存するなけん。我靈よ、主を讃め揚げよ。

明治三十六年十二月一日印刷
明治三十六年十二月五日發行

定價金貳拾錢

編輯兼發行者　山田藏太郎　東京市神田區淡路町一丁目一番地
印刷者　大野啓六　東京市麴町區飯田町四丁目廿一番地
印刷所　成功堂　東京市麴町區飯田町四丁目廿一番地
發行所　正教青年會　東京市神田區駿河台紅梅町六番地

發賣元　東京神田區淡路町二丁目一番地　使命社

正教青年會發行書籍

宗教と人

全壹冊

菊版半截百四十頁

定價金拾五錢郵稅貳錢

本書に對する批評

警世（第四拾七號）是れ正教青年會より發行せる小冊子也、爾かく小冊子なりと雖も內容は頗る大、想も亦高く、考も深し、宗教の必要なる所以と宗教と倫理の關係を說明せる二編皆趣味津々として讀む可く、附錄露國文藝小品、人は偉大なる物也：等を集めて眞に天鉞の標題に耻ちず、奇想天外より落つる者あり、世の滔々たる駄文學小說の徒に裏裝を美にして如何はしき淫猥の婦人畫を載せて漫りに人の子の心腸を腐蝕する者に反し、吾人の精神を涵養する大、青年諸子幸に一本を購ふて讀め

聲（第二百七十八號）本書は山田藏太郎氏の編纂に係る袖珍百卅餘頁の小冊子なり載する所正教會に祭鈴木氏の「無宗教者への警告」同神學士潮沼氏の「根本的倫理問題」及び附錄として「天鉞」と題せる短文數篇あり。說く所語る所何れの宗派にも偏らず、口語体の記述にて頗る解し易き書き振り也。凡ての基督教界の人は讀んで多少の稗益なくんばあらず。

日曜雙誌（第百拾六號）本書は世人に其最大要求物を示さんとの目的を以て正教青年會の發行したる小冊子なり、書中收むる所は鈴木司祭の「無宗教者への警告」潮沼神學士の「根本的倫理問題」の二にして、附錄「天鉞」と題せる數種の短篇あり。未信徒に讀ませしめて能く眞の道を明めしむるに足るの價値あり。菊版半切百三十頁餘。

93
118

使命

毎月一回五日發行●一部金五錢

●一ヶ年前金六拾錢郵稅金六錢

社說●正教の見地に立ちて現代青年を指導せんことを期す議論溫健觀察精緻なり

論說●內外名士の論文を紹介す特に露國文壇の精華を譯載して以て其思潮を傳ふ

講演●毎月一回の例會に於ける先輩の演說筆記を掲く多く速記術を用ゐ細大無洩

史傳●古聖の傳記を傳へて修養に資し又は露國文豪傳を紹介す今現にゴーゴリ傳

文藻●露國文學を傳へんこと本欄の最も努むる所なり

正教青年會機關

使命社

聖書研究●聖書を文學的に科學的に研究を試む感情と理生の調和の裡に信仰躍々湧く

海外評壇●主として露國思想界の潮流を紹介し文學科學其他一切に涉りて最とも努む

日曜學校●新年初刊より新に欄を設け純宗教的話題以外の材料を供して其後軍となる

倶樂部便●消息あり通信あり時評あり諷諭ありて毎號大に賑ふ社中の心的生活の反射

發兌元

東京神田淡路町一丁目一番地

賣捌所●神田猿樂町二五中庸堂●本郷春木町小杉書店●神田西紅梅町供智堂●神田美土代町青年會館小島書店

使命社

97
118

020713-000-6

97-118

宗教と自然美

山田　蔵太郎／編

M36
ABI-0533